学校代号 10532　　　　学　号 S1512W0782

分 类 号 　　　　　　密　级 公开



湖南大學

HUNAN UNIVERSITY

硕士学位论文

《西域物语》翻译实践报告

学位申请人姓名 万玉莹

培 养 单 位 湖南大学外国语与国际教育学院

导师姓名及职称 罗明辉副教授

学 科 专 业 翻译硕士

研 究 方 向 日语笔译

提 交 日 期 2018 年 4 月 23 日

学校代号：10532

学　　号：S1512W0782

密　　级：公开

湖南大学硕士学位论文

《西域物語》の翻訳実践報告

学位申请人姓名：万玉莹

导师姓名及职称：罗明辉 副教授

培 养 单 位：湖南大学外国语学院

专 业 名 称：日语笔译

论文提交日期：2018年4月23日

论文答辩日期：2018年5月20日

答辩委员会主席：冉毅 教授

湖 南 大 学

学位论文原创性声明

本人郑重声明：所呈交的论文是本人在导师的指导下独立进行研究所取得的研究成果。除了文中特别加以标注引用的内容外，本论文不包含任何其他个人或集体已经发表或撰写的成果作品。对本文的研究做出重要贡献的个人和集体，均已在文中以明确方式标明。本人完全意识到本声明的法律后果由本人承担。

作者签名：万玉莹　　　　　　日期：2018 年 5 月 23 日

学位论文版权使用授权书

本学位论文作者完全了解学校有关保留、使用学位论文的规定，同意学校保留并向国家有关部门或机构送交论文的复印件和电子版，允许论文被查阅和借阅。本人授权湖南大学可以将本学位论文的全部或部分内容编入有关数据库进行检索，可以采用影印、缩印或扫描等复制手段保存和汇编本学位论文。

本学位论文属于

1、保密□，在______年解密后适用本授权书。

2、不保密☑。

（请在以上相应方框内打“√”）

作者签名：万玉莹　　　　　　日期：2018 年 5 月 23 日

导师签名：　　　　　　日期：2018 年 5 月 23 日

要 旨

本翻訳実践報告書は井上靖作品「西域物語」の中国語訳過程を対象にしたものである。原文は7章からなり、内容としては歴史物語と作者井上靖の旅行体験から書き綴っていたものである。二度の西域旅行の印象をもとに、作者井上が青年時代から憧れる地——西域というところに展開された苛烈な民族争覇の歴史、古代の詩人や英雄たちの活躍、城邑から城邑へと移動していった隊商の生活などをいきいきと描いた紀行文作品である。

原文から漢の時代のシルクロードが目の前に浮かび、二千年あまり前のひとときを十分味わうことができるような気がする。井上靖の作風といえば、淡々とした述べ方が日本の文壇で有名なことであり、いかにそのような書き方を中国語で再現できるか、一時期戸惑ったことがある。戸惑ってもどうしても一外国人としての井上の西域に対する認識や井上の作品に注いだ熱情を中国人読者に伝えたいという意識が強まり、最後まで頑張って作品の一部を翻訳できるようになったのである。

振り返ってみると、当初この作品を自分の翻訳対象にしたのは正しいともう一回確認することができた。したがって、翻訳実践報告書という形で自分が辿ってきた道をもう一回見てみたい。

筆者が翻訳したのは最初の三章の内容である。本実践報告書ではドイツの機能主義翻訳理論の関連内容を結びつきながら、主にテキストタイプと翻訳方法という二つの角度から自分の翻訳経験を再確認したい。

本稿の正文は主に三つの部分からできている。第一部分では原作の内容などの紹介であり。原文テキストの性質をテキストのタイプと言葉の特徴から見たものである。第二部分は翻訳の過程である。翻訳する前の準備、翻訳の過程で採用した翻訳法をまとめる部分である。第三部分は一番重要な部分である。自分が翻訳過程で工夫したあるいは難しく感じた具体的な翻訳例を挙げながら、主語の省略、連体修飾語の処理という翻訳上の実践問題や「悲愁歌」を例とした詩の翻訳という特殊例についてまとめた部分である。

キーワード：井上靖　西域　紀行文　機能翻訳理論

摘 要

本翻译实践报告以井上靖作品《西域物语》的汉译过程为对象。作品原文主要由7章构成。内容由历史故事和作者井上靖的旅行经历组成。它是一部游记作品，以作者的两次西域之行的印象为背景，描写作者井上靖青年时期就以向往向往的西域这块土地上上演的激烈的民族争霸史，往昔诗人和英雄事迹，以及穿梭于各个城市之间的商队们的生活。

品读原文，两千多年前汉朝的丝绸之路仿佛跃然眼前。就井上靖的写作风格而言，其清淡如云的写作风格享誉文坛，笔者对翻译过程中如何运用汉语忠实表达曾经犹豫不决。但越是犹豫，就越发想要把作为一个外国人的井上靖对于西域的认识以及其倾注于作品中的热情传达给中国的读者，于是终于坚持到底，翻译完成了该作品的部分内容。回顾自己的翻译过程，再一次感觉到当时自己选择这部作品作为自己的翻译对象是正确的。因此，希望通过翻译实践报告的形式来对自己的翻译过程进行总结。

笔者所译为该作品的前三章内容。在本翻译实践报告中，笔者将联系德国功能主义翻译理论的相关内容，从文本类型和翻译方法两个方面总结自己的翻译过程。

本报告主要由三部分组成。第一部分是对原文内容等的介绍。从文本的类型和语言特征分析原作品的文本属性。第二部分主要是对翻译过程的介绍。总结译前准备、翻译过程中运用的翻译策略。第三部分是本文最重要的部分。以在翻译过程中煞费苦心过或者觉得有难度的实例，总结主语省略、定语处理等翻译实践上的问题，以《悲愁歌》为例的诗歌翻译这一特殊领域的翻译问题。

关键词：井上靖；西域；游记；功能翻译理论

目 次

第1章　井上靖と『西域物語』

本翻訳実践報告書では、日本人井上靖の紀行文作品『西域物語』の中国語訳及び翻訳経験を報告する。原文テキストは日本人作家という立場から古代中国の歴史と西域に関する物語を踏まえて書かれたものである。一方、中国では今、「一帯一路」という重大な政策を推進しており、世界政治や経済などもこの「一帯一路」に集中し続けている。西域といえば、昔のシルクロードにとって欠いてはならぬところであるため、本翻訳実践報告書にかかる『西域物語』の中国語訳は意味深いものだと思われる。

1.1 原文テキストについて

「西域物語」は日本作家——井上靖によって書かれた作品である。原文は、著者の二度の西域旅行の印象をもとに、この地で展開された苛烈な民族争覇の歴史、往古の詩人や英雄たちの活躍、城邑から城邑へと移動していった隊商の生活などをいきいきと描き、夢と冒険と謎に満ちた西域の魅力をあますところなく伝える。著者の青年時代からの憧憬の地であった西域の歴史を辿りながら訪れた60年代の現地と交錯する。著者自身が実際にシルクロードを訪れたときの行動・見聞・感想も詳しく書き記された。著者の繊細な筆致を通し、シルクロードの風景がまるで読者の前に展開された。

この作品は西域に取材した。西域は古来、中国人が中国の西方にある国々を呼んだ総称である。本来は東トルキスタンを指したが、拡張されて西トルキスタン、さらに地中海沿岸に至る西アジアをもいう。西域といえば、世界でも有名なシルクロードに言及しなければならない。原文には何回も出てきたシルクロードは、中央アジアを横断する古代の東西交易路の総称で、中国を発し、地中海沿岸に達する、物資・文化・民族などの東西移動の最も重要な幹線である。中国特産の絹がこの道を通って西方へともたらされたことから十九世紀末ドイツの地理学者リヒトホーフェがシルクロードと命名する。[①]古代のシルクロードから啓示を得て、わが国の習近平主席が2013年に「一帯一路」という戦略を提出した。これからシルクロードはますます重要な役割を果たすようになるかもしれない。ですから、中国人として我々は古代のシルクロードの歴史と現状を知る必要があると思われる。

1.2 井上靖について

井上靖（1907－1998）は現代日本の名高い作家である。1907年、北海道の旭川で 生まれた。中学生の時代から文学に夢中している。大学在学中に創作活動を開始し、「井

[①]「スーパー大辞林3.0」より引用される。松村明. 三省堂編修所. (C). 2006-2018

上泰」というペンネームで刊行物に作品を発表し始めたが、作家として文壇にデビューするのが遅かった。新聞社の仕事を辞め、小説家として創作を始めたのは昭和二十六年、つまり1951年のことである。実は早くも1949年に、井上靖によって創作された短編小説「猟銃」と中編小説「闘牛」は当時かなり大きな反響を引き起こした。そして「闘牛」は1950年に第22回芥川賞を受賞した。[1]1955年から歴史小説の執筆を始めた。彼の作品はただ一つのジャンルにこだわらず、歴史小説、時代小説、それに詩、紀行文、エッセイなどにも及んだ。

井上靖は漢文学の素養があり、中国の「史記」、「漢書」、「後漢書」などの史書も熟読するから、中国の歴史にかなり詳しいと言っても過言ではない。このことについて彼が文章で一度触れたことがある。「大唐西域記」だけでも、暗誦できるほど何回も読んだ。[1]彼は学問の姿勢が厳格で、創作するたびに、必ず大量な歴史的文献を調べておく。ですから、彼の作品はほとんど誤りがなく、考証に耐えられるものである。

1957年から井上靖は作家や学者として、頻繁的に中国を訪れた。それをきっかけに、それからの数十年、彼は中国の歴史と文化に基づいて、一連の作品を創作した。彼は83年の生涯で27回も中国に訪れた。中国古代西域の民俗、風土、歴史を踏まれ、「楼蘭」、「敦煌」、「天平之甍」などの広く愛読された小説を創作した。これらの作品を通して中国の歴史や文化を知る日本国民も多くなってきた。19世紀末、日本では敦煌ブームが巻き起こり、数多くの日本人が中国へ敦煌を見にきた。その原因はまさに井上靖の西域小説「敦煌」を読んだからである。歴史の滔々たる時間の流れをほどよく表現し、彼の作品を読んだら数十年から数百年の時の流れを自ら歴史の証人として体感したような気分に浸れている。中国の作家王蒙は井上靖のある小説の序文に、このような話を書いていた。「他写的深沉、细腻、富有真实感，娓娓动人，同时他又写得相当‘平淡’，不慌不忙、不露声色、不加夸张修饰、不玩弄任何技巧地表达出人生中许多撕裂人的心肝的痛苦。作品中表达出一种悲天悯人的心肠，一种超越了最初的情感波澜的宁静，一种饱经沧桑的对历史、社会、人生的俯视，一种什么都告诉了你的直截了当同时什么也没有告诉你的彬彬有礼。他的风格很独特，很有味儿。」

1.3 テキスト分析

表現形式から見ると、原文は紀行文に属する。紀行文とは、旅行によって体験したり見聞したりしたことを中心につくられた文学作品で、日記、書簡、詩、随筆のような形式を用いる。日本文学では「土佐日記」に始まり、「海道記」「東関紀行」「奥の細道」などが代表的な作品である。

井上靖は西域に対する愛情は非常に深いから、これを背景にして創作された作品はかなり多い。

1.3.1 テキストタイプ

「テキストタイプ別翻訳理論」はドイツの Katharina Reiss によって提出された。この理論はテキストの種類によって、言語記号の3つの機能のうちではどれが重要になるかが違ってくると主張する。学術書やニュースのような「情報型」のテキストは叙述機能が優勢であり、伝達内容の等価が求められる。文学的「表現型」のテキストは表出機能が優勢で、芸術表現の等価が要求され、宣伝文のような「効力型」のテキストは、訴え機能が優勢で、訴え効果の等価が求められるというわけである。[2]イギリスの翻訳家 Peter Newmark は《Approaches to translation》という本で大体同じような分け方を述べた。(1981:12-13) そして、文学作品を上述の「表現型」のテキストに分けられる。そして Newmark によって、テキストの言語機能は一つしかないわけではなく、同時に三つの機能をも持っている可能性もある。訳者はテキストタイプによって、異なった翻訳ストラテージを採るべきである。では、このテキストはいかがであろうか。まず原文は文学作品であるから、「表現型」のテキストに属する。つまり、表出機能が一番重要な役割を果たすことである。前の言った通り、このような表現型のテキストは芸術表現の等価が求められる。ですから、翻訳するとき、原文のニュアンスをできるだけ失っていないということがかなり重要である。また、表現技巧から見ると、このテキストは一人称からの叙述と三人称からの記述を主とし、叙述機能も優勢である。ですから、原文の内容をちゃんと目標語の読者に再現することも重要である。

1.3.2 言葉の特徴

この作品は紀行文に属するが、単なる旅行日記ではない。歴史物語や歴史的な出来事のことは三人称で述べていたが、そのとき現地での経験のことは淡々とした口調で記述した。個人経験についての部分は言葉が地味であり、主に記述の方法を使っていた。それに対して、歴史物語の部分は生き生きとした対話と描写が多い。

また、原文には敬語が出た。歴史物語を述べるとき、著者は三人称の口調で、史書に記録されたことを簡潔に述べた。中には皇帝と臣下、上級と下級の対話があり、敬語もたくさん出てきた。

1) 原文:「汝は月氏に使するというが、月氏という国について何か知っているか」
武帝が訊ねると、
「とんと<u>存じませぬ</u>」
三十歳ぐらいの躰の頑丈な男は答えた。意志が強そうで大きな眼を持っている。
「何年ぐらいで帰って来るつもりだ」
「見当付きませぬ」
「生きて再び帰って来れぬかも知れぬぞ」

武帝が言うと、
「そうかも知れませぬ。が、畏れながら天子がお求めになった以上、誰かが応じなければなりませぬ。それならば、他の者が応ずるより、きっと自分の方が適任だと考えたのであります」
訳文：“朕听说你想出使月氏，关于该国你都知道些什么？”汉武帝问道。
“臣一无所知” 他回答道。张骞三十出头身体健壮，眼睛很大，看上去是个意志坚强的人。
“你预计要多久才能回来？”
“臣不知”
“那你可知你可能不能活着回来了”
听到汉武帝这样说，张骞回答道。
“也许吧，臣虽然害怕但既然是圣上的旨意，总要有人来完成。比起其他人，臣认为自己更能胜任这一任务。”
汉武帝对他的回答甚为满意。
この文例は漢武帝と郎官張騫の会話である。この会話から二人の身分差別がはっきり分かる。皇帝は目上の人で地位が高いから簡体を使っていた。それに対して、張騫は庶民で地位が低く、皇帝に対して敬意を表すために敬語を使わなければならない。「存じます」は「知る」の敬語で、謙譲語に属する。これは張騫が自分を卑下して表現することによって、相対的に皇帝を高め、それによって敬意を表わすわけである。「お求めになる」は尊敬語で、皇帝の動作を高めることによって、敬意を表わす。
2) 原文:「匈奴から脱出し、大月氏国を目指します時、大宛という国を通過しました。この大宛国という国は、匈奴の西南、漢を隔たること一万里のところにございます。習俗は農耕で、稲麦も植えており、果物も作っております。そこで産する葡萄酒のうまさと来たらこたえられませぬ。そうそう、この国で報告申し上げねばならぬのは、この国で産する馬でございますが、…」
訳文：“从匈奴国逃出来寻找大月氏国的时候，途中经过了一个叫大宛的国家。这个大宛在我国的西边、匈奴国的西南边，与我国相隔一万里。”那里以农耕为生，种植水稻、小麦，还有水果。那里的葡萄酒堪称一绝。对了，还有一件事臣一定要上奏皇上，那里的马叫做汗血宝马。
これは張騫が皇帝に申し上げる内容であり、皇帝に敬意を表わすために敬語を使っていた。今度は丁寧語である。丁寧語というのは話し手が聞き手に対して敬意を直接表したり、改まった気持ちで、言葉遣いを丁寧にしたりするときに用いられることである。ここの「ます」と「ございます」は丁寧語に属し、事物を美化し、丁寧に叙述するために用いるものである。また、「申し上げる」は「言う」の謙譲語である。1) の謙譲語と同じく自分を卑下して皇帝を高め、それによって敬意を表わす表現である。

第 2 章　翻訳の過程

2.1 翻訳の事前準備

翻訳する前の準備は非常に重要である。これは翻訳の第一歩である。この段階では、筆者は主に次の 4 つのことを準備しておいた。まずは、原文全体を一通り読むことである。原文の大体な内容を把握し、次の資料収集のために準備する。次に、資料などを幅広く収集する。資料が多ければこの翻訳実践の基礎がよくできている。原文は井上靖によって書かれた作品であり、描かれたのは西域のことである。ですから、著者井上靖の創作背景や経験、西域についてのこと、紀行文に関することなどを調べる必要がある。それに、原文には西域の事件や物語もたくさん述べていたから、それも事前に調べて把握したほうがよい。それから、筆者は作品の内容を何度も読み、分からない言葉と理解しにくい文を標記する。最後に、標記されたところを分析する。それに原文に記録された史実をもう一度確かめる。

こうすれば翻訳するときはさらに言葉をうまく使いこなして、手際よく翻訳することができる。

2.2 翻訳ストラテジーの選択

周知のように、人の主動的な行為は目的によって行うのが基本的である。翻訳は重要な異文化コミュニケーション活動としても例外ではない。(古丹, 2015) ドイツの機能派を代表としての機能主義翻訳理論は大きな影響力を持つ翻訳理論の一つである。この理論は 1978 年にドイツの Hans J. Vermeer と Katharina Reiss によって誕生され、その後、 Justa Holz Mantari と Chrisiane Nord によって受け継がれ、体系化されたものである。1.3.1 の言った通り、テキストタイプから見ると、原文は表現型に属するから、翻訳するとき一番重要なのは本文のニュアンスを失ってはいけない。そして、原文の表現は分かりやすく、大衆向けであるから、筆者は原文の著者の風格に従い、できるだけ分かりやすく翻訳したい。

今回の翻訳実践報告において応用されたのは機能主義的翻訳理論の核心としてのスコポス理論である。スコポス理論はドイツの機能理論の中で最も影響力のある理論である。スコポス理論によれば、いかなる翻訳であれ、翻訳過程を決める最も重要な原則は翻訳行為全体の目的である。つまり、何よりも翻訳の目的を重視するということである。この理論によって、翻訳過程は必ず守らなければならない規則は三つある。
1. スコポスルール：これは三つの規則の中で最も重要なものである。訳文の所期の目

的が翻訳の方法とストラテジーを決める。

２.結束性ルール：目標テキストが受容者の状況において受け入れることができ、分かりやすく翻訳すれば成功である。

３.忠実性ルール：翻訳は起点テキストと関連する訳出を目指す。[2]

原文は歴史性と文学性という二つの特徴がある。原文の情報に忠実に伝えるだけでなく、言葉の文学性も保証しなければならない。

この理論に基づき、その翻訳の意図と想定される読者に応じ、機能主義的理論のスコポス原則を応用する。我が国の読者の文化背景を考慮に入れ、できるだけ著者が書かれた内容を再現する。一種の翻訳方法に拘らなく、読者が分かりやすいために直訳、意訳、加訳、減訳、分訳などの翻訳方法を採る。

第3章　翻訳例の分析

3.1 固有名詞

原文は西域の歴史物語にまつわる作品であるから、古代の地名とか官職名とかいろいろな固有名詞が出てきた。歴史に取材したから、真実性が非常に重要である。誤訳したら、読者の理解に影響を及ぼす可能性があるから、翻訳するときは慎重に扱わなければならない。

3.1.1 地名

この作品は昭和五十二年、つまり 1977 年に出版されたものである。そして主に古代の西域に関することを書かれたから、そのところはすでに消えてしまった可能性もあれば、名が変わった可能性もある。

また、これらの地名はだいたい英語から音訳してきたものであるから、間違えた可能性もある。翻訳するときはちゃんと調べなければならない。今でも使っている常用語なら、直接に翻訳すればいい。特別な言葉があれば、例えばすでに使っていない旧称などは直接に日本語で調べれば中国語の意味が探せない。ですから、筆者はまずその言葉の対応する原語を調べておき、それから辞書とかインターネットでその原語の中国語の意味を調べ、一番ふさわしい翻訳を選択した。たとえば、原文には「フルンゼ」というところが言及された。このところは今キルギスタンの首都であり、１９９１年に「ビシケク」と改名されてしまった。その言葉の翻訳を調べるときは、まず日本のネットあるいはグーグルマップで「フルンゼ」とさがし、それから「Frunze」という英語で表現された単語を調べれば、“伏龙芝”という翻訳が見つけられた。「アンディジャン」、「クワ」、「ホージェント」、「コーカンド」などの地名もこのように探したのである。

1) 原文:「大宛の北は康居、西は大月氏、西南は大夏、東北は烏孫、東は扜弥、于闐」

訳文:“大宛的北边是康居（古西域国名，今巴尔喀什湖与咸海之间），西边是大月氏（今新疆伊犁河上游一带），西南是大夏（古西域国名，今阿姆河以南，兴都库什山以北地区），东北是乌孙（汉时西域国名，今巴尔喀什湖东南，伊犁河流域 ），东边是扜弥（古代西域国名，古址在今新疆于田县库里雅河东古拘弥城遗址一带。）、于阗（古代西域国名，今新疆和田县，塔里木盆地南缘）。”

これらの地名はすべて古代の国家の名である。筆者はこのような地名を翻訳するとき、読者がはっきり分かるように、注釈を加え、現在の位置を明確に示した。

3.1.2 官職名

原文にはいろいろな官職名も出てきた。
2）原文：郎官といえば、兎に角宮中勤めの官吏である。
訳文：说到“郎官”，就是在宫中做事的官吏。
（郎官：秦、汉，郎官属郎中令，员额不定，最多时达五千人，有议郎、中郎、侍郎、郎中四等。以守卫门户，出充车骑为主要职责，亦随时备帝王顾问差遣。）
3）原文：「汝は中郎将として三〇〇人の部下と六〇〇頭の馬を持つがいい。」
訳文：“朕任命你为中郎将，帅 300 士兵赐 600 匹马随行。”
（中郎将:汉朝武官的级别分：将军、中郎将、校尉三级。由于将军并不常置，有战事时才冠以统兵者将军之称，所以平时一般武官所能获得的最高官职为中郎将，品秩为“比两千石”，掌管皇家卫队，属光禄勋管辖。）
4）原文：お蔭で博望侯から庶民になり下がった張騫は、再び漢が西域に派する国使として浮び上がることができたのである。
訳文：而早前从博望侯被贬为庶民的张骞也因为重新成为大汉出使西域的使者这一差事而再次翻身。
（博望侯：张骞的封爵。张骞因出使西域抗击匈奴，功勋卓越，被汉武帝封为“博望侯”，取其“广博瞻望”之意，封地即为今方城县博望镇。）
5）原文：大行とは賓客を接待する役目で九卿につらなるというのは高官の座に列することである。
訳文：所谓大行就是负责接待宾客的官职，位属九卿所以座位列于高官席内。
（大行=大行令。九卿之一，掌管王朝对少数民族的接待、交往等事务。）
それらはすべて古代の官職名であるから、読者はみんなそれに詳しいわけではないから、理解しやすいように注釈を加えた。

3.2 主語省略の翻訳

主語は文の成分の一であり、文において、述語の示す動作・作用・属性などの主体を表す部分である。ある学者の考えでは、日本語の文法では、主語の省略が容赦されているというよりも、主語がない文が完全な状態として成立する。日本語の曖昧さと日本人の独特の文化背景などの原因で、あからさまな表現を極力に避ける。そして、言葉の表現もできるだけ少なくするものである。

3.2.1 日本語における主語省略の原因

蔡艶輝が『浅谈日语中的主语或人称代词的省略』という文章では、主語が省略される原因を以下の６つに分けられた。
1）前後の文脈から主語が明瞭である場合。例えば、二人が会話する場合、聞き手と

話し手がはっきり分かる。

2) 敬語動詞による主語省略。敬語動詞は動作の主体が限られる。尊敬語なら、二人称と三人称が省略されるのは普通である。尊敬語なら、動作の主体は話し手で、一人称を省略しても構わない。

3) 用言は方向性を示す機能がある場合。例えば、嬉しい、悔しいなどの主観的な形容詞。主語は話し手であるから、省略されても判断しやすい。

4) ある（特定の）表現形式による主語省略。「う」「よう」「つもり」「まい」といった表現は一人称に限られるから、主語は省略される。

5) 授受表現による主語省略。「くれる」「あげる」「もらう」といった授受動詞は方向性を示す機能があるから、主語を省略しても、はっきり判断できる。

6) 終助詞は方向性を示す機能がある場合。終助詞というのはその文の叙述内容についての話し手の感情や、聞き手に対する訴えの気持ちを表す助詞である。ですから、主語を示す機能がある。

要するに、日本語では主語を省略する場合はいろいろある。それは内容の重複を避け、できるだけ文を簡潔にするためである。

3.2.2 中日両言語における主語省略

日本語だけではなく、中国語でも主語の省略が起こる。では、これから、両言語における主語省略の比較を見よう。

盛文忠による『雪国』冒頭四十文前後の調査によれば、日本語原文の場合は主語を表示されている比率は 55.8%。それに対して、中国語においては三つの対訳を調べられており，主語を表示されている比率はそれぞれ，85.7%(中国語訳 1)，92.3%(中国語訳 2)，85.1%(中国語訳 3)という結果が出た。この結果から見ると、日本語は中国語に比べ、主語が省略されることが多いということが分かる。

徐倩婷は中国語では主語が省略される原因は主に 3 つあるとまとめた。“会话省”は日本語と同じように、会話するとき、話し手と聞き手は判断しやすいから省略されるのが普通である。 “承前省”というのは、前と後の文は同じ主語で、いつも後ろの主語を省略するということである。前の主語を省略すれば、“蒙后省”に属する。例えば、“他吃完饭，（他）就去上学去了。”この文は“承前省”に属する。前の文は後の文と同じな主語がある——“他”である。ここでは、重複しないように、前の主語を表示し、後ろの主語が省略された。同じ通り、“（他）吃完了饭，他就上学去了。”という文は“蒙后省”に属する。日本語と比べ、中国語のほうがより簡単である。

3.2.3 翻訳における主語省略問題

要するに、日本語は中国語に比べ、主語が省略されることが多い。そのため、日本語を中国語に翻訳するとき、主語を補うことがかなり大切なのである。

筆者は主語の省略文を翻訳するとき、主に次のように処理した。まず、主語を確定する。つまり省略された主語を見つけることである。次に、主語を補うかどうかを自分で判断する。最後に、語順を調整し、中国語の表現習慣に従い訳文を整える。

5）原文：「汝は月氏に使するというが、月氏という国について何か知っているか」
武帝が訊ねると、
「とんと存じませぬ」
三十歳ぐらいの躰の頑丈な男は答えた。意志が強そうで大きな眼を持っている。
「何年ぐらいで帰って来るつもりだ」
「見当付きませぬ」
「生きて再び帰って来れぬかも知れぬぞ」
武帝が言うと、
「そうかも知れませぬ。が、畏れながら天子がお求めになった以上、誰かが応じなければなりませぬ。それならば、他の者が応ずるより、きっと自分の方が適任だと考えたのであります」

訳文：“朕听说你想出使月氏，关于该国你都知道些什么？”汉武帝问道。
“臣一无所知” 他回答道。张骞三十出头身体健壮，眼睛很大，看上去是个意志坚强的人。
“你预计要多久才能回来？”
“臣不知”
“那你可知道你可能不能活着回来了”
听到汉武帝这样说，张骞回答道。
“也许吧，臣虽然害怕但既然是圣上的旨意，总要有人来完成。比起其他人，臣认为自己更能胜任这一任务。”
汉武帝对他的回答甚为满意。

これは漢武帝と張騫との会話である。会話の場合、聞き手と話し手がはっきり分かり、主語を推測することができるから、人称代名詞がよく省略される。そして蔡艶輝が述べた第２点のように、日本の敬語動詞は主語を暗示する機能がある。例文の「存じませぬ」は日本語の謙遜語に属する。謙遜語というのは話し手が聞き手や話中の人に対し、敬意を表すために、自分または自分側に立つと思われるものや動作などをへりくだって言い表すことである。主語を表示する必要はない。でも、中国語にはこのような方向性を示せる動詞はない。翻訳するとき、主語を補わなければ意味がよく通じないから、主語を補わなければならない。二人の身分によって、それぞれ「朕」、「臣」というふさわしい呼称を加訳した。

6）原文：鳥が食物を運んで来、狼が乳を飲ませてくれたからである。
訳文：鸟儿为他找来食物，母狼为他哺乳。

この例は上述の５番目の授受表現による主語省略である。ここで省略されたのは「彼」という言葉である。「(さ) せてくれた」という授受動詞は「わたし」や「わたしグループ」に他人がした行為を「うれしい」や「ありがたい」と感じたときに使う。日本語に場合では、このような授受表現を使うと、行為の方向がはっきり分かるから、主語を省略しても、判断できる。しかし、中国語にはこのような表現がないから、文の流暢性を保証するために、主語「彼」を補わないといけない。

3.3 連体修飾語の翻訳

修飾語とは文の中でほかの語句の内容などに説明を加える語句のことである。修飾語には、名詞を修飾する「連体修飾語」と、動詞や形容詞を修飾する「連用修飾語」２つがある。

3.3.1 中日両言語における連体修飾語

中国語は孤立語で、単語が文中で使われる時、屈折や膠着の手続きなしに用いられる言語であり、文法的な機能は配列の順序によって決まる。それに対して、日本語は膠着語である。実質的な意味を持つ単語あるいは語幹に、文法的な機能を持つ要素が次々と結合することによって、文中における文法的な役割や関係の差異を示す言語である。修飾語は被修飾語の前に置くのは決まっているわけである。そのため、日本語は中国語より複雑で長い連体修飾語がずっと多いと考えられる。

3.3.2 翻訳における連体修飾語の処理

周知のとおり、日本語は〈S+O+V〉型の言語である。長い修飾語を主語や目的語の前に置くことが多いようである。この点は、中国語の「定中構造」(定語+中心語)という語順が一致するから、一般的にいえば、日本語の簡単な連体修飾語を中国語の「定中構造」に直訳すればいいであるが、複雑な連体修飾語なら、直訳の方法を採用すれば流暢性に影響を及ぼす可能性が高く、読者も理解に苦しむかもしれない。

では、複雑な連体修飾語を翻訳するときはどうすればいいのか。まず、修飾語と被修飾語を確認する。次は、原文の意味が変わらないことを前提として、長い修飾文を分解する。最後は、中国語の習慣に従い、全句を組み立て、語順を調整し、中国語の言語表現に合わせるような形にする。

6) 原文：硬軟さまざまな政策をとった歴代の天子の中で、最も積極的に攻勢に出て、たとえ一時的であるにせよ、匈奴を国境から遠く奔らせるのは漢の武帝であろうか。
訳文：历代天子软硬兼施，出台了各种政策，其中汉武帝是最积极地展开攻势的。他将匈奴从边境驱逐出去。

まずは修飾成分を確認する。「硬軟さまざまな」は「政策」の連体修飾語である。そして「硬軟さまざまな政策をとった歴代の」は「天子」を修飾する。直訳すれば、

“在出台了各种软硬政策的历代天子中”となる。この翻訳は中国語の表現習慣に合わない。次は長い修飾語を分解する。筆者は「硬軟さまざまな政策をとった」と「歴代の天子」に分解した。最後は語順を調整する。「歴代の天子」は「硬軟さまざまな政策をとった」、中では…という文を組み立てた。“历代天子软硬兼施，出台了各种政策，其中……”と翻訳した。

7）原文：遠くに白い雪を頂にもった山脈の見えるフェルガナの平原に立って、しっくりと胸にはいって来る思いがあるとすれば、それはやはり人間のことであった。

訳文：站在费尔干纳的平原上可以看到远处白雪皑皑的山脉，若要问我那时的所思所想的话，其实我是想到了一些人。

「遠くに白い雪を頂にもった」は「山脈」を修飾する。「遠くに白い雪を頂にもった山脈の見える」は「フェルガナの平原」を修飾する。「遠くに白い雪を頂にもった山脈」、「見える」と「フェルガナの平原」に分解した。中国語の語順に従って、改めて組み立てれば、「フェルガナの平原」に立って、「遠くに白い雪を頂にもった山脈」が「見える」。中国語に翻訳すれば、“站在费尔干纳的平原上可以看到远处白雪皑皑的山脉”となる。

8）原文：そして現在のように国境が定められ、隊商が城邑から城邑へ、オアシスからオアシスへ自由に往来することができない時代になっても、西域といった呼び方がある限り、初めに持った未知、夢、冒険といった要素は消えていないのである。

訳文：虽然现在各国之间已经有了明确的国境线，商队也不能再像以前那样自由地穿梭在城镇和绿洲中，但只要它还被称作西域，它就永远不会失去未知、梦幻、神秘、冒险的色彩。

「国境が定められ、隊商が城邑から城邑へ、オアシスからオアシスへ自由に往来することができない」という長い文は「時代」を修飾する。「国境が定められ」は原因である。「城邑から城邑へ」と「オアシスからオアシスへ」は並列関係である。中国語の語順によって、因果関係を示す「国境が定められ」を前に置き、次は並列関係を示す「城邑から城邑へ」と「オアシスからオアシスへ」である。“虽然现在各国之间已经有了明确的国境线，商队也不能再像以前那样自由地穿梭在城镇和绿洲中”と翻訳したほうがいいと思う。

これはすべて長い連体修飾語で主語を修飾する例である。この語順で直接に翻訳すれば、筋がよく通っていないから、分訳という方法を使い、複合句あるいは長文を短い句に切り離して翻訳する方法である。

3.4 詩の翻訳——漢詩「悲愁歌」の翻訳を中心に——

日本では、中国の伝統詩を総括して、漢詩と呼んでいる。ここの漢詩は漢代の詩だけではなく、古詩、楽府、絶句、律詩などいろいろな種類がある。原文に出たこの漢

井上靖の訳詩の分析は以上である。次は筆者の翻訳である。前の言った通り、筆者は井上靖の詩の形式を残すため、できるだけ原文の字句・語法に忠実して翻訳した。まず、文体は原文と揃えて分かりやすい口語体に翻訳した。それから、形式も意識して行数を揃えていた。ただし、日本語と中国語とは文の切れ目が違うから、句数は異なっても仕方がない。翻訳は言語の変換と同時に、文化やコミュニケーション状況の変換をも伴うため、同化するか異化するかは訳者次第である。井上靖が翻訳するとき、日本の読者が分かりやすいように、意識して中国の独特な文化要素を同化した。これらの要素をそのまま異化して翻訳すれば、中国の読者に対しては理解ができないかもしれない。例えば、6句目の「まんまるい家」という表現はパオのことを指す。ここのパオは古代中国の北方に住んでいる少数民族など遊牧民が住む、移動生活に便利な饅頭形の組み立て式の家である。ここは"圆圆的房子"と翻訳すれば、意味がよく分からないから、"毡帐"と翻訳した。9句目の「饐えたおちち」というのは乳が腐ってすっぱくなるという意味である。詩の主人公劉細君が異族の飲食に慣れないことと彼女の辛さを強調するためにこのように表現するようである。中国語の"酪"は牛・馬・羊などの乳を発酵し、半凝固させた食品である。ここでは意味のまったく対応する言葉が見つからず、中性名詞の"酸乳"に翻訳した。6、7、8、9句目は"以毡帐为家，兽皮为墙，生肉为食，酸乳为浆"と形を整えている。読んだら、リズム感が感じる。10、11句は「思い出されて来るのは　故国のこと許り」ここは直訳すれば、"脑海中浮现出的都是我的故乡"。それに比べ、"脑海中不断浮现起我的故乡"の方が適当だと思う。最後の4句は主人公の夢である。彼女の夢はさっさと故郷に戻ることであるが、現実は主人公が異国に嫁ぎ、もう自由がなく、故郷に帰りたくても帰れない。自由に飛べる鳥を羨ましがっている。「夢にも忘れない故国に帰れましょうのに」を直訳せず、"就可以回到我心心念念的故乡"と翻訳した。"心心念念"という言葉は「胸に深く染み込んで片時も忘れない」という意味であり、主人公の望郷の念をよく表現できると思う。

おわりに

本翻訳実践報告書は井上靖の「西域物語」を中国語に訳す実践についての報告書である。この作品は日本の作家井上靖によって書かれた紀行文である。歴史的事実により事前考証して書かれた作品であり、読者に豊かな歴史的風景を繰り広げている。この名作を中国人読者にも読んでほしいため、この作品を自分の翻訳課題にして、翻訳してみたのである。

翻訳する前、いろいろと下準備しておいた。この作品の創作背景を把握するために、著者の経験や創作された作品などの資料を調べてみた。原文に引用された歴史資料もいちいち確認をし、そして原文の情報全般を正確に忠実に伝わるために、原文中の地名も古地図をふくめてすべて地図で確認できた。

翻訳のほうはドイツの機能主義翻訳理論に導かれて、これまで身につけていた翻訳技法も合わせて考慮に入れ、原文を翻訳してから、何度も添削して完成できたのである。

本報告書は三つの部分からできている。

まずは原文についての紹介の部分であり、作品の内容や作者井上靖のことを紹介し、そして作者やその生活環境などに照らしてテキストの性質について分析してみた。また、ドイツの機能主義翻訳理論を応用しながら、テキストのタイプと言葉の特徴を分析してみたのである。

次は翻訳の過程についてまとめてみた。翻訳する前の事前準備段階と実際翻訳の全プロセスにおいてどんな翻訳ストラテジーを使ったかについて説明した。

第三の部分では今回の翻訳作業において難点となった主語省略と連体修飾語の翻訳、そして漢詩の翻訳について説明してみた。具体的な翻訳例をあげながら具体的にどんな翻訳法によって自分の翻訳文に到達できたかの全容を説明することになっている。なお、漢詩の訳し方についても「悲愁歌」の例によって説明することになったのである。

なお、翻訳文としては自分では満足できると思われるが、文学性に関してはまだ不足な点があり、残念に思うところも存在する。これから文学翻訳への努力も必要ではないかと思うようになった。

今度の翻訳で、筆者は自分の限界が分かり、今後努力する方向もはっきりわかる。優れた作品を翻訳するには、翻訳の能力を続けて向上しなければならない。

詩は漢代の劉細君によって創作された騒体詩で、中国の『楽府詩集』に収録される。漢の代、武帝は、朝廷の宴会や儀式で演奏される音楽や歌を編輯して演奏した役所である樂府を設立し、後には各地の音楽を採取させた。後世、楽府が採集、整理して歌われた民歌をまとめて「楽府詩」というようになった。それ以降この形式や詩題（楽府題）を使った詩歌をも『樂府』と呼ぶようになった。楽府は、古体詩、近体詩と並んで中国の韻文の三大様式の一つである。曲をつけて歌うものであることから、樂曲ともいうべきものであり、その詩文を歌辞ともいった。題名には、歌、行、引、曲、吟などの文字を冠したものが多い。ここに取り上げたこの詩の文体は騒体で、楚辭体とも呼んでいる。虛字脚（兮、其、些、以、與、於、而）が押韻の働きを担っている。

天山の湖の小節では、烏孫の右夫人細君は母国から来た使者に自分の作った一篇の辞を示した。この辞は８文字で一句をなしており、しかも「兮」という字が句ごとの真ん中にあって、一句を二分するものであり、韻律を作られるものである。

原文の著者井上靖は日本の小説家としてよく知られている。と同時に、散文詩らしい散文詩の書き手としてもかなり名高いと思われる。彼は『文學界』昭和二十四年十月号に「猟銃」を掲載して職業作家に専念する前に、足掛け二十年にも亘る長い詩作歴を持っている。このような井上靖の文学修行時代とも言うべき長い詩作期間に、後年の井上文学を支える様々な要素が培われたであろう。もちろん、その後、彼は詩の創作に手を引かなかったようである。詩作は彼の生涯にわたって貫かれたといっても過言ではない。

日本人は漢文を翻訳するとき、書き下し文[②]という方法を使うのが普通である。それは漢文のもとの形をできるだけ残すためである。でも、訓読書き下し文は用いられている語彙は一切訳さない。そのため読者にとって語義と用字の解釈などはかなり分かりにくいと思われる。井上靖は原詩の形に拘らなく、自分なりの理解で半創作して自由に翻訳した。

原文と照らし合わせることができるように、筆者はできるだけ原文の字句・語法に忠実して翻訳する。筆者は見識が狭く、学問も浅いから、少しの間違いもあるかもしれない。今はこの「悲愁歌」を原詩と井上靖が翻訳したものとともに見ておこう。

[②]書き下し文：漢文を日本語として読み下し、日本語の語順に合わせて、漢字仮名交じりで書き改めた文。「スーパー大辞林 3.0」松村明. 三省堂編修所. (C). 2006-2018

わたしの家は わたしを嫁がせに 天のどこかに。	吾家嫁我兮天一方，	我的国家 把我嫁到了 天的另一边。
わたしが仕えているのは 異国烏孫の王さま。	远托异国兮乌王延。	让我去侍奉 乌孙国的国王。
まんまるい家 けものの皮の壁	穹庐为室兮旃为墙，	（从此我）以毡帐为家， 兽皮为墙，
食べものは生のお肉 すするのは饐えたおちち	以肉为食兮酪为浆。	生肉为食， 酸乳为浆，
明けても、暮れても 悲しみで心は痛み 思い出されて来るのは 故国のこと許り。	居常土思兮心内伤，	无论是白天还是夜晚， 我都无比的痛心难过。 脑海中不断浮现起 我的故乡。
ああ 鵠になりたい。 ああ あの黄色い鵠になれたら 高い高い空を飛んで 夢にも忘れない故国に 帰れましょうのに	愿为黄鹄兮归故乡。	啊啊， 我想化身为一只黄鹄， 啊啊 如果我能化身为黄鹄， 就可以在天空中自由翱翔， 就可以回到 我心心念念的故乡。

井上靖の訳した詩は古語を用いらず、現代語を用いる。そのため、原詩の漢語はほとんど訳語に取り入れていない。原詩は 6 句で、井上靖はそれを 20 句に訳した。句数は原詩とは揃えていないが、文学的な効果を求めたようである。1 句目と 2 句目は原詩の語義を分かりやすく翻訳した。10 句目からは原詩にない表現を挿入した。例えば、原詩の「居常土思兮心内伤」という表現は主人公がしばらく離れていた故郷を懐かしく感じる気持ちを見せる。それに対して、井上靖の翻訳した詩は「明けても、暮れても；故国のこと許り。」といった言葉を通し、その感情をより一層に強調された。最後の「ああ　鵠になりたい。ああ　あの黄色い鵠になれたら　高い高い空を飛んで　夢にも忘れない故国に　帰れましょうのに」は主人公の気持ちを感じ取り、原子にははっきり表示されていない部分を補充した。これで、原詩が描かれている思いや気持ちがすべて読者に伝えられる。

参考文献

[1] 刘东波.2016.“苍狼”与历史小说之外一井上靖作品《苍狼》线上读书会实录[OL].http://app.myzaker.com/news/article.php?pk=5822ec5f1bc8e01952000002(2018年4月8日读取)

[2] 岩坂彰.2010. 岩坂彰の部屋-第 19 回機能主義的翻訳理論[OL].https://e-honyakusquare.sunflare.com/shuppan.sunflare.com/iwasaka/dai_19.htm(2018年4月9日读取)

[3] 藤濤文子.2007.《翻訳行為と異文化間コミュニケーション -機能主義的翻訳理論の諸相》[M].京都：松籟社.

[4] 蔡艳辉.2009.浅谈日语中的主语或人称代词的省略[J].科教文汇.(14):256-256.

[5] 盛文忠.2006.『雪国』の中国語訳から見る日中両言語の認知的差異-文型・主語・動詞・数量詞の使用を中心に[J].日本認知言語学会論文集.(06).

[6] 王鳳莉.2009.主語省略における日中両言語の対照研究[J].内容の要旨及び審査の結果の要旨.26:44-48.

[7] 潘存坤.2014.日本語連体修飾語の漢訳について[J].科技世界.(03).

[8] 嘉瀬達男.2015.近現代における漢詩和訳について-詩人、詞人、歌人と学者[J].《小樽商科大学人文研究》.(130) 218-256.

[9] 王红国.2008.井上靖的西域情节与其西域作品[J].安徽文学:评论研究.(4):24-24.

[10] 罗勇，谭爽.2010.浅谈日语中主语的省略[J].黑龙江教育学院学报.29(1):161-162.

[11] 姜滕龙.2013.以翻译目的论为基础《苍茫时分》的翻译实践[D].北京第二外国语学院.

[12] 袁盛财.2014 浅析井上靖诗歌的特点[J].现代语文(学术综合版).(2):67-69.

[13] 王薇媛.2016.《教育虐待・教育忽视》的翻译实践报告[D].湖南大学.

[14] 王珏.2013 德国功能主义翻译理论对文学翻译的适用性[J].海南师范大学学报(社会科学版).(3):106-109.

[15] 萩原朔太郎.2009.詩の翻訳について[OL].https://www.aozora.gr.jp/ cards/000067/files/48341_35101.html(2018年4月16日读取)

[16] 段银萍.2003.日语复杂连体修饰语的误译原因探源[J].天津外国语大学学报.10(3):21-26.

[17] 徐丹.2016 浅析日语连体修饰语的汉译问题[J].中华少年.(18).

[18] 刘纯敏.2017.日语“复文”中“连体修饰语”、“连用修饰语”的汉译技巧[D].吉林大学.

[19] 江小容. 2016.日语连体修饰语及翻译[J].考试周刊.(54):97-97.

[20] 宋智悠. 2012.对日语连体修饰语及其语顺倾向的考察[D].南京大学.

[21] 杜玲莉. 2012.中日主语省略现象对比研究[J].乐山师范学院学报.(9):56-59.

[22] 杨丽华. 2013.日语会话中人称主语的省略及相关教学建议——以第一人称和第二人称主语的省略为例[J]. 无锡商业职业技术学院学报.13(5):87-90.

[23] 张瑞书. 2015.对汉日语中主语省略问题的逻辑思考[J].科教文汇. (1):217-218.

[24] 邵小丽.2012.以《雪国》及其译本为例看汉日主语省略现象[J].牡丹江大学学报.(10):103-107.

[25] 王立群.2005.游记的文体要素与游记文体的形成[J].文学评论.(3):155-160.

[26] 肖立.2009 历史在游记中的作用[J].新读写.59-59.

[27] 葛志珍.2016.《中国-悠久帝国》节选翻译实践报告[D].广西师范大学.

[28] 刘春英.1990 日本纪行文学的兴隆成因及其演变[J].外国问题研究.(1):42-45.

[29] 张爱平.2012.浅谈目的论在文学翻译中的指导作用[D].首都师范大学.

[30] 古丹.2015.目的论在文学翻译中的指导作用初探[J].山东社会科学.(S2).

[31] 徐倩婷.2010.现代汉语中的成分省略—主语个案研究[D].湖南大学.

謝　辞

本翻訳実践報告書を作成するにあたり、指導教官の羅明輝先生からはご多忙中にもかかわらず、貴重なご指導をいただきまして、テーマの決定から、言語表現まで丁寧にご指導いただきました。心より深く感謝しております。

また、ご意見をくださりました先生と先生に心より感謝申しあげます。

そして、研究資料をご提供くださいました湖南大学に感謝しております。

最後に、私の研究生活を支えてくれた先輩、友人、家族に厚くお礼申しあげます。

付録１：原文

『西域物語』―井上靖

序章

私は学生時代に西域というところへ足を踏み入れてみたいと思った。本当に西域に旅行できないものかと考えた時代がある。西域という言い方は甚だ漠然としたものであるが、これは中国の古代の史書が使っている言い方で、初めは中国西方の異民族の住んでいる地帯を何となく総括して、西域という呼び方で呼んだのである。だから昔は、インドもペルシャも西域という呼称の中に収められていた。要するに中国人から言えば自国の西方に拡がっている未知の異民族が国を樹てている地帯を、何もかもひっくるめて西域と呼んだのである。だから西域という言葉の中には、もともと未知、夢、謎、冒険、そういったものがいっぱい詰め込まれてある。その後インドやペルシャは西域とは呼ばなくなり、西域というと専ら中央アジアに限定するようになって今日に到っている。民族争覇の派手な歴史的事件がこの広大な沙漠地帯を舞台として次々に起こっており、未知、夢、謎、冒険といった諸要素がこの地域に集中している観があるからである。そして現在のように国境が定められ、隊商が城邑から城邑へ、オアシスからオアシスへ自由に往来することができない時代になっても、西域といった呼び方がある限り、初めに持った未知、夢、謎、冒険といった要素は消えていないのである。私はいま中央アジアという呼び方をしたが、これも亦甚だ漠然とした呼称であって、明確にその範囲が決められてあるわけではない。まあ、アジア大陸の中央部、海に出口を持たない内陸地域で、東はゴビ沙漠から西はカスピ海に到る広大な地域と考えていいだろう。

従来この中央アジアはパミール高原を境にして東を東トルキスタン、西を西トルキスタンと呼ばれて来ているが、現在の政治的概念で言えば、東トルキスタンは中国側、西トルキスタンはソ連側ということになる。中国側の新疆ウイグル自治区に当たる東トルキスタンは目下旅行者ははいれないので判らないが、ソ連領の西トルキスタンは往時の西域ではない。カザフ、ウズベク、キルギス、トルクメン、タジクの五共和国が誕生しており、往時のオアシスの城邑は、大ビルディングの建ち並ぶ近代都市に生まれ変ろうとしており、不毛の沙漠地帯には運河が何本も走り、その流域をみごとな緑地帯、みごとな耕地帯に変えている。多かれ少なかれ、中国側の東トルキスタンも同じことであろう。同じ西域という呼び方をしても、西域の実態はすっかり変ったものになりつつある。併し、依然として変らないものもある。幾ら緑地帯が縦横に走っても、なお沙漠は沙漠として依然として大きな不毛の骸を横たえており、アム・ダリヤ、シル・ダリヤは悠々として流れ、天山、パミールには四時雪を戴いた六〇〇〇メ

ートル級の山々の鋭い刃先が天を窺っているのである。そしてそこに住む算えきれない異民族は、それぞれの言葉と、それぞれの風俗習慣を失わないで生きているのである。

そして、もう一つ変らないものがある。それは歴史である。過去に背負った歴史である。これだけはどうすることもできない。日本国内の戦争とは異って、異民族同士の争覇であり、結果的に見ると、それは民族の移動でもあり、その民族が持った文化、宗教の移動でもある。過去に於て西域が持った歴史を振り返ってみると、アレキサンドロスの遠征を初めとしてアラブの侵入もあれば、モンゴルの侵入もある。最も大きいものだけを拾っても、その度に西域はすっかり異なったものになっている。そしてその歴史の爪跡は今でも到るところに遺されている。アラブの遺した爪跡もあれば、モンゴルの遺した爪跡もある。そしてまた、気の遠くなるような長い歳月はたくさんの歴史の欠片を土の中に埋めてもいる。その大部分は私たちの知らない歴史である。中央アジアという広大な地域は、今日も依然として、私には“西域”である。未知、夢、謎、冒険、そんなものがいっぱい詰まっている。近代文明の大きな力がそれを全く異ったものにしようと手をかけ始めているが、なかなかどうして、そんなことで手に負えるしろものではないのである。

私は三年前の一九六五年と今年（一九六八年）の二回、西トルキスタンを旅した。この二回の旅で、西域の歴史の上には必ず登場して来るサマルカンド、ブハラ、タシケントといった諸都邑、沙漠に囲まれている全くの沙漠の町アシュハバード、ウルゲンチ、ヒワ、それからパミールの山ひだの中の新しい街ドゥシャンベ、史記に出て来る大宛国—現在のフェルガナ盆地に散らばっている諸都市、アンディジャン、マルギラン、コーカンド、フェルガナ、或はまた玄奘三蔵の『大唐西域記』や『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』などに登場して来る天山の麓の故地と目されているトクマク、アク・ベシム、あるいはフルンゼ、そういったところに一応足を踏み入れてみた。

そして、この西域の旅で最も楽しかったことは、その土地土地が持っている歴史を考えたり、思い出したりすることであった。私は歴史家でも歴史研究家でもないので、勿論私の考える歴史というものは、甚だ片寄ったものであるし、たまたま持合わせた僅かの知識の中からその土地に関するものを引出す以外仕方ないのであるが、それでも、今まで持っていた歴史の欠片が、その土地に置いてみると、まるで異った生き生きとしたものになるのを感じた。

私は西トルキスタンの旅で、最近ソ連の考古学者の手で掘出された三つの遺跡を見ている。一つはペンジケントの遺跡で、ここは曾て一二〇〇年前にソグド人が住んでいた城邑であるが、アラブの圧政に耐えかねたソグド人たちがこの街を捨ててから、そのまま土中に埋まってしまったところである。もう一つは現在発掘を始められてい

るアク・ベシムの遺跡である。これも亦同じ時代の遊牧民たちが営んでいた城邑である。それから古代サマルカンドの眠っているアフラシヤブの遺跡。

この三つの遺跡をみて強く感じたことは、いずれも見はるかすような高原風の地帯にあたることと、それぞれが雪を戴いた天山の前山が遠く見えている何とも言えぬ美しい場所であるということであった。

そういう点では、三つの土中から出て来た往古の城邑は、そこのまん中に立つ限り区別ができないほどよく似ているものであった。古代の遊牧民たちは、異民族に追われ、追われて、その居を移しているが、いずれも申し合わせたように帳幕を営むのに眺めの雄大な美しい場所を選んでいるのである。

私が歴史家であったら、三つの出土遺跡からたくさんの貴重なものを拾うに違いない。併し、小説家の私にはそうした知識の持合わせもないし、そういう芸当もできない。ただその城邑を構えた場所の美しさに感心するだけの話であるが、ソグドを初めとする古代遊牧民の持つ民族の生命力のようなものが、これまでとは異ったものになって、こちらに迫って来る。これから歴史の書物でソグドとかサカ人とかにお目にかかる度に、その民族の姿がこれまでとは違ったものに映ってくることだけは確かである。

私はまたいくつかのタキを見た。タキというのはアーチという意味であるが、同時にいくつかの丸屋根の組合わせからなるバザールの意味でもある。これはふつう大きな通りの十字路にあり、ブハラとヒワのものが最もよく保存されていた。ブハラではこのバザールの一つは宝石市場とも呼ばれていた。十字に交叉している通りにすっぽりと屋根をかぶせたような恰好の商店街で、十字に交叉しているところが多少広くなっていて、そこの高い屋蓋の天窓から光線が落ちるようになっている。内部はひどく暗い。現在は勿論店舗は並んでいないが、タキがいかなるものか、ほぼ完全な形でそれを知ることができる。なるほど宝石市場と呼ばれただけあって、たしかにここでは宝石が売買されたに違いないと思われた。はるばると沙漠を越えて来た隊商の商人たちは、小さい宝石の粒を握ってこの薄暗い屋内商店街へはいって行く。薄暗い中で商人たちの眼が怪しく光り、掌の上に載せられてある小さい宝石の粒が怪しい光を発している。雑多な人種がうごめいているバザールの内部を眼に浮べると異様なものである。乱れ飛んでいる言葉も、群がり集っている人々の服装も、皮膚の色も、頭髪の色もそれぞれに異っている。そうした内部の到るところで宝石の鑑定と値踏みは行われている。なるほど、宝石の売買取引は、明るい陽の光の射している戸外より、こうした薄暗い屋内店舗の方がふさわしい場所であるに違いない。

もう一つのヒワのバザールの方は十字路になっていない。一本の商店街が伸びているだけで、トンネルの中に、商店が両側に並んでいると思えばいい。こちらは宝石市場とは呼ばれないで、奴隷市場と呼ばれていた。専門の奴隷市場ではないが、時には

奴隷も売買されたのであろう。この方は少し明るい。このトンネル商店街の中央に一つの横門があって、そこから隊商宿に通じられるようになっている。隊商宿は大きい広場を取巻くように造られてあり、その大きい広場は駱駝のパーク場である。

現在、ウズベク共和国ではほぼ完全な形で遺っているタキはこの二つしかないそうである。これを見たお蔭で、私には隊商というものが、いくらかはっきりした形をとって眼に浮かんで来るようになった。何十頭もの駱駝を並べて長い沙漠の旅をして来た商人たちは、それぞれの街で、街の入口にある隊商宿にはいる。宿の前には駱駝がいっぱい詰まっている。駱駝の鳴声を聞きながら商人たちは寄宿舎のような小さい部屋部屋にはいって眠る。翌朝になると、駱駝の群れの間を縫って、商人たちは屋内市場の中へはいって行く。一番持運びが簡単で、大きな取引のできるのは宝石である。商人たちは手に手に宝石を握りしめている。真物もあれば贋物もある。暗い中で発するその光沢がすべてを決定する。

沙漠で生きる人たちにとって、どうしても必要なものは、生活に必要なものを売買するもう一つの住民たちのバザールである。この方は露店である。フェルガナ盆地の古い町マルギランのバザールを見たが、これがブハラ、サマルカンド、その他でたくさん見たバザールの中で最も凄まじいものであった。フェルガナ盆地には五十の民族が雑居しているというが、その五十の民族がみんな代表者を出しているのではないかと思われるほど、そこに集っている人々の服装も顔立ちも言葉も異っていた。マルギランは古く静かな街であるが、ここだけには夥しい数の人々が渦巻き、老弱男女、それぞれが売ったり買ったりしながら、生きるために声高に叫び、呶鳴り合っていた。そこで売買されているものは雑多であった。驢馬のような大きいものから、種子、粉末のような小さいものまであった。まさに中央アジアの心臓であった。おそらく昔から少しも変らぬ姿で、このバザールは今日に到っているのであろうと思われた。

中央アジアの古い都市の回教寺院の塔の頂は申合わせたように青い。空の青さとも海の青さとも異なった一種の独特の人間の心を吸い取ってしまうような深い青さなのである。沙漠の旅行者は、また沙漠の都市の住人は、この青さを眼にすることなしには、その日その日を送れなかったのであろう。この塔頂の青さはおそらく沙漠で生きる人たちが生きるために、どうしても必要なものであると思われる。沙漠の旅行者は遠くからこの青い陶板で包んだ塔の頂を眺め、そしてそれに吸い込まれるようにして城門を持った聚落へはいって行ったのであろう。

中央アジアの河川で一番有名でもあり、往古から沙漠の川の代表と目されているのはシル・ダリヤとアム・ダリヤである。シル・ダリヤをその上流であるフェルガナ盆地で見たが、水量の豊かな美しい川であった。その水を引いた何本かの運河が広大なフェルガナ盆地をみごとな棉畑にしているくらいだから、その水量が豊かであるのは当然なことである。併し、キジル・クム沙漠の一角でその下流の姿を眼にすると、見

違えるほど河相は貧しくなっている。下流へと流れ降るに従って水を少しずつ沙漠の土と天日とに吸われ、流域の樹木に奪り上げられ、次第に水量は少なくなり、河幅も狭くなって行く。下流部で見たアム・ダリヤの場合もほぼ同じであった。下流になるほど支流の水を集めて大きくなって行く普通の川というものとは凡そ違ったものである。沙漠の川は流れ降るに従って、川は痩せ細って行くのである。

天山から流れ出しているゼラフシャン川はその流域のオアシス地帯にペンジケント、サマルカンド、ブハラといった諸都邑を作っているが、その下流の末端は沙漠の中に消えると言われていた。実際に消えていたのであろう。沙漠の川として当然持たなければならぬ運命であるが、併し、沙漠の中に消える川というものが、長く私には不思議に思えてならなかったのである。現在はゼラフシャン川の水も、それが沙漠の中に吸い込まれて姿を消すわがままは許されていない。ウズベク共和国はその水を集めて、みごとな人造湖を造っている。

大宛の汗血馬　1

古代中国の天子が例外なく最も手を焼いたのは匈奴政策であった。匈奴は前四世紀末より三世紀にかけて五〇〇年ほどの間、中国の歴史に中国にぴったりと寄添って現れて来る。この北方の剽悍な遊牧騎馬民族のお蔭で、中国の歴史はすこぶる多彩なものになっている。万里の長城というとんでもないものを築いたのも匈奴のためであったし、異族に降嫁する王昭君の悲劇も匈奴懐柔政策の産物である。と言って、攻勢に出てもひとすじ縄で行く相手ではない。漢の高祖でさえ、うまうまと大軍に包み込まれてしまって、危うく一命を落しかけている。

硬軟さまざまな政策をとった歴代の天子の中で、最も積極的に攻勢に出て、たとえ一時的であるにせよ、匈奴を国境から遠くに奔らせたのは漢の武帝であろうか。その対匈奴戦に於て赫々たる武勲をたてた衛青、霍去病等は名将軍として歴史にその名を留めるに到っている。同じ漢の武帝の時に、初めて西域に通ずるという東西交渉史の上における文字通りの画期的大事件が起きたが、これまた匈奴のお蔭であると言っていいようである。

ある時、匈奴の捕虜が言った。

「匈奴の単于（主権者）は月氏を攻めて、王を討ち取り、その王の頭蓋で洒落れたカップを作り、それで酒を飲んでいる。これを知って月氏の人たちは匈奴に対して共に天を戴かざる気持を持ち、どこかの国と協力して匈奴を撃ちたがっているが、あいにくその協力者が見付からず、徒らに恨みをのんでいる許りだと聞いている」

この捕虜の言葉が何人かの口を経て、武帝の耳にはいった。武帝は即座に自分こそその月氏の協力者になろうと思った。武帝は一度決心したことは、すぐ実行に移さず

にはいられなかった。天下に布告して、月氏に使するものを求めた。併し、月氏という国がどんな国か、またそれはどれだけ遠隔の地にあるか、詳しいことを知っている者はなかった。中国よりずっと西方に月氏という国があるぐらいの漠然たる知識しか持っていなかった筈である。玉門関という西方国境の門を出ると、一口に西域という言葉で総括されている未知の地帯が拡がっているだけのことである。その奥行も、深さも判ってはいない。

やがて何日かすると応募者の名簿ができ上がった。どうせ生命知らずの無鉄砲な連中に決っていたので、そこに記されてある身分や経歴など当てにはできなかった。が、その中に一人、郎官の身で応募した者の名があった。郎官と言えば、兎も角宮中勤めの官吏である。名は張騫と言った。武帝は直ちにその人物を引見した。

「汝は月氏に使するというが、月氏という国について何か知っているか」

武帝が訊ねると、

「とんと存じませぬ」

三十歳ぐらいの躰の頑丈な男は答えた。意志が強そうで大きな眼を持っている。

「何年ぐらいで帰って来るつもりだ」

「見当付きませぬ」

「生きて再び帰って来れぬかも知れぬぞ」

武帝が言うと、

「そうかも知れませぬ。が、畏れながら天子がお求めになった以上、誰かが応じなければなりませぬ。それならば、他の者が応ずるより、きっと自分の方が適任だと考えたのであります」

張騫は答えた。この言葉は武帝の気に入った。

張騫は百余人の従者を与えられて、未知の地帯西域の旅に立った。正確には張騫の年齢も判っていないし、西域の旅に立った年も判っていない。『史記』にも『漢書』にも、そうした記述はないが、『資治通鑑』の推定によると出発したのは建元二年（西暦前一三九年）ということになっている。

張騫が帰国したのは、それから十三年後であった。武帝が忘れた頃になって、張騫は匈奴の女と匈奴人の従者だけを伴って帰って来た。匈奴の女は彼の妻であった。張騫は己が過した十三年について語った。玉門関を出ると直ちに匈奴に捕われ、そこで十年の歳月を過し、妻も得、子供もできたが、匈奴の監視のゆるんだ時、従者を随えてそこを脱出した。そして沙漠の国々を経て、漸くにして目的地である大月氏国に到ったが、すでにそこの王は匈奴のために殺され、太子が代って王位についていた。新王は匈奴と事を構えるような気持は微塵も持っていず、漢と軍事同盟を結ぶことなどとんでもない話であった。張騫は一年余大月氏国に留めた上で帰国の途についたが、帰りも亦匈奴に捉えられ、惨憺たる苦労を嘗めていた。

大月氏と軍事同盟を結ぶという目的は果さなかったが、武帝には張騫の話はすこぶる魅力あるものであった。

「匈奴から脱出し、大月氏国を目指します時、大宛という国を通過しました。この大宛という国は、漢の西、匈奴の西南、漢を隔たること一万里のところにございます。習俗は農耕で、稲麦も植えており、果物も作っております。そこで産する葡萄酒のうまさと来たらこたえられませぬ。そうそう、この国で産する馬のことでございます。汗血馬と申しまして血の汗をかく奇妙な馬でございますが、天下にこれ以上の馬はないとされております。馬格は立派で、毛並みはつやつやとしており、人の心も判るほど怜悧で、一日よく千里を走ると言われております。この国の人口は数十万で、大小七十の城を持ち、兵はいずれも騎射をよくします。何しろ乗っている馬がみごとなので、騎乗の射撃のうまいのは当然なことでございます」

それからまた張騫は続けた。

「大宛の北は康居、西は大月氏、西南は大夏、東北は烏孫、東は扜弥、于闐」

武帝の知らない国々が次々に張騫の口から飛出した。張騫は大月氏までしか行かなかったので、大宛、康居、大月氏以外の国のことは聞いて来たことを上奏したのである。

武帝の心は、張騫が口を動かす度にひどく明るい豊かなもので膨らんで行った。未知の、異民族の住む国々が大きい夢をもって飛込んできた。そこで産する珍奇な物産も欲しかったが、取り分け関心をもったのは大宛という国の名馬であった。血の汗をかく馬など見たことも聞いたこともなかった。天下無双の名馬というのなら、それを手に入れたいと思った。大月氏と軍事同盟を結んで匈奴を撃つ夢は壊れたが、代りに大宛国の名馬を駆使して匈奴を撃つ夢が新しく生まれたのである。同じ匈奴を撃つにしてもこの方がずっとすっきりしている。

張騫が報告した大宛国というのは現在のウズベク共和国のフェルガナ盆地に樹てられていた国であり、康居国というのは現在のキルギス共和国の地に当たっている。そして武帝の命に依って張騫が目指した大月氏国はブハラ東方に樹てられていた国である。

張騫はこの旅に依って、最初の西域の報告者として東洋史の上に不朽の名を留める幸運者となった。張騫は玉門関を出、タクラマカン沙漠の横たわっている東トルキスタンを通過し、更に天山、パミールのアジアの屋根を越えて、西トルキスタンの地に足を印しているのである。タクラマカン沙漠を通過するに当って、張騫は天山山脈の南麓沿っているいわゆる天山南路を採ったと見られている。中国から東トルキスタンを目指すには古来三本の道があった。天山の北麓沿いに進むのを天山北路、その南麓沿いに進むのを天山南路と称した。このほかにタクラマカン沙漠の南辺の国々を経廻って行く道があり、これを西域南道と称した。従って西域南道に対する呼び方をする

と、張騫の採った天山南路は西域北道と言うことになる。中国側東トルキスタンからソ連側西トルキスタンへと、中央アジアを横断する大旅行をやってのけているのである。大冒険家と言ってもいいし、大探検家と言ってもいい。

そして前記の三本の道は天山あるいはパミールの山塊群を越えて、西トルキスタンにはいるのであるが、今日地図を見ると、その入り方が二つある。一つはウズベク共和国のフェルガナ盆地にはいる道であり、一つはキルギス共和国のチュー盆地にはいる道である。この二つは、いわゆるシルク・ロードの主要な幹道として東西の文化交流のために大きな役割を果たしているが、張騫の場合は大宛国の所在地であるフェルガナ盆地へと降り立って行ったのである。

張騫以前にも、中国から東トルキスタンへ、更に東トルキスタンから西トルキスタンへと、水がにじみ流れるように、人間の往来はあったに違いない。その途中にタクラマカン沙漠が横たわっていようと、天山やパミールの四時雪を戴いている峰々がいかに厳しく遮っていようと、そんなことにはお構いなしに、人々は何かの目的をもって往来していたのである。そして、リレー式に、西トルキスタンの物資は東トルキスタンの地に運ばれ、それはまた中国にもはいっていたに違いない。またその逆なコースをとって中国の産物は西方にも渡っていたであろう。バントは次々に受けつがれていたのである。

そして、そのような人間の意志の軌跡のようなものとして、東西交渉路は天山やパミールの山中を細い糸となって、あるところはくっきりと、あるところは絶え絶えに、あるかないかの細さとなって、続いていたのである。機上から天山やパミールを見ると、何よりも人間を拒否している大きな神の意志を感ずる。ここだけは人間どもを一歩たりとも踏込ませないぞといった、そんな神の意志を感ずる。併し、太古から人間はその底知れず奥深い山のひだひだに分け入り、そこに自分たちの歩く道を刻んでいるのである。

わが張騫は、そうした道を通って、最初の公人として天山の険を越え、天山の向こう側にある明るい平原に降り立ったのである。明るい平原という言い方をしたのは、もうそこから、天山やパミールのような世界の屋根はなくなり、アラル海、黒海方面へと際限なく広い沙漠地帯が拡がるからである。

私はフェルガナ盆地の南部アンディジャン州を、張騫には申しわけないが、自動車でドライブした。大平原にはみごとな舗装道路が走っている。ひと口にフェルガナ盆地と言っても五二、四〇〇平方キロメートルの大平原で東西三二〇キロメートル、南北一七四キロメートル、ヨーロッパの幾つかの国に相当する大きさである。東、北、南は山脈で囲まれ、西のホージェント方面だけが出入口になっている。この盆地は往古から今日までに何回か異民族の侵寇を受けているが、アレキサンドロスもアラブも、モンゴルもみなこの西部の出入口から侵入して来ているのである。そして北のチャツ

カル山脈と東の天山の二つに源を発するシル・ダリヤが盆地の北部を流れており、またこの水を引いて造った運河が何本か走っている。詳しく言うと、運河は北に一本、南に二本、そのほかに中央の一本が目下造られつつある。中でも南部の一本はフェルガナ運河と呼ばれ、長さ三五〇キロ、幅二八メートルの大きなもので、これらの運河のお蔭で盆地は着々と耕地化されつつある。

言うまでもなくこのフェルガナ盆地はウズベク共和国の一部であり、居住者の大部分はウズベク人であるが、他に五十の民族を数えることができる。現在はフェルガナ、アンディジャン、ナマンガン、コーカンドの四つの都市が、ホージェント、クワ、ウズゲンと共に紀元前からあったと言われる古い町である。

張騫が訪れた頃のこの盆地がどのようなものであったかは想像できないが、併し、天山を越えて来た張騫はこの盆地の東部、いまのアンディジャン州へ降り立ったことだけは疑うことはできない。そして恐らく盆地の南部を、つまり現在のアンディジャン、ウズゲン、コーカンドを結ぶ線を西へ向かって行ったのであろう。そして張騫はホージェント方面の出口からは出ないで、もう一度北部の山脈を越えて康居（キルギス）へはいって行ったものと思われる。康居は天山の前山がすぐそこに見える地帯である。前述したように天山越えてこの地帯へも降りられるが、張騫はこのルートは採らなかったのである。そしてここから沙漠の海へ出て大月氏国を目指したのだ。大月氏国は現在のブハラの東方とされているが、地図の上に線で張騫の進んだルートを描き、天山の山ひだに、シル・ダリヤの河畔に、沙漠の海のまっただ中に張騫の姿を置いてみると、それはひどく小さいものとして感じられる。

武帝は大宛国の汗血馬を手に入れて、堂々と匈奴に決戦を挑みたかったが、匈奴の度々の侵寇はそれを待つことを許さなかった。武帝は汗血馬を手に入れることはあと回しにして、ひとまず大将軍衛青をして匈奴を討たしめた。元朔六年（西暦前一二三年）のことである。そしてこの作戦に、十年の捕虜生活を通して匈奴の事情に明るい張騫を校尉として従軍せしめた。果して張騫は匈奴が屯する水草地帯の地理に詳しく、ために軍に利するところ多かった。この功に依って張騫は博望侯に封ぜられた。

翌元朔七年、張騫は再び匈奴討伐作戦の一翼を担ったが、こんどは合戦の期日に遅れるという失態を演じた。根っからの武人ではないので張騫を責めても始らなかったが、併し、そのため主力の一部は敵軍に包囲されてさんざんな目に遇ったので、武帝も張騫をそのままにしておくことはできなかった。本来なら斬罪に相当するところであったが、西域探検の功に依って、位階を剝ぎ取るだけにとどめた。張騫は一介の庶民になった。

これから三、四年は驃騎将軍霍去病の華々しい活躍の時代になる。霍去病は匈奴軍数万を破り、敗敵を追って祁連山にまで達し、ために河西一帯の地に匈奴の一兵をも見ることなきに到った。

匈奴作戦が好調に展開すると、武帝の頭にはまた遠い西域の国々のことが浮び上がって来た。西域の国々のことになると、張騫を召し出して相談する以外仕方なかった。実戦では失態を演じたが、こと西域の国々のことになると、張騫は別人の観があった。喋ることはみな生き生きとしていた。

「そうそう、申上げることを忘れておりましたが、匈奴にその父を討たれ、匈奴の陣中で育てられた昆莫という英雄がございます。匈奴に育てられたのに、長ずると匈奴から離脱して現在別に烏孫国を樹てております。この人物は交渉次第で帝のお力になるかと存じます。何しろ匈奴でさえ、この人物には手出しすることを控えているくらいで、なかなかの器量人でございます。漢が財宝を与えて、この人物を手なずけ、烏孫と連合することができましたら、匈奴の受ける痛手はたいへんなものでございましょう。それより何より、西域諸国はみな烏孫に倣って漢に臣属の礼をとって来ること疑う余地はございません」

武帝にとっては充分魅力ある進言であった。

「よし、それならばさっそくそれを実行してみよう。汝は中郎将として三〇〇人の部下と六〇〇頭の馬を持つがいい」

武帝は言った。こういうことになると気前がよかった。お蔭で博望侯から庶民になり下がった張騫は、再び漢が西域に派する国使として浮び上がることができたのである。

張騫は、たくさんの引出物を三〇〇頭の馬に積んで、再び西域の旅に出で立ち、烏孫国を目指した。同じように上に飛鳥なく、下に走獣なしと言われる沙漠の海を越えるにしても、こんどは大月氏ほど遠い国ではない。烏孫は現在の新疆ウイグル自治区とソ連領との境界地帯に蟠踞していた民族と考えていいだろう。併し、手ぶらでは帰らなかった。烏孫の使者十数人と数十頭の烏孫産の名馬を連れ帰った。それからまた張騫は同行した部下を大宛、康居、大月氏、大夏、安息、身毒、于闐、扜弥といった遠い国々へ派することをも忘れなかった。大夏はアフガニスタン北境の国、安息はペルシャ、身毒はインド、于闐、扜弥は西域南道に沿っていた国国である。派手好きな武帝は烏孫の使者十数人が大挙してやって来たことで十分満足だった。武帝はさっそく張騫を大行に任じ、九卿につらねた。大行とは賓客を接待する役目で九卿につらなるというのは高官の座に列することである。烏孫から帰った翌年、功なり名とげて張騫は他界したが、張騫の死後、彼が西域諸国に派した部下たちは、それぞれその国の者を伴って帰国した。張騫の西域開拓者としての偉名はこうしたことに依って一段と高くなった。張騫は武帝の期待にこたえるだけのことはちゃんとやっておいたのである。

大宛の汗血馬　2

張騫の歿後、珍しい風俗の異族を引見する度に、武帝の心の中には、張騫が西域について語ったことが、また改めて大きい力を持って羽搏き始めた。

—大宛の汗血馬！

天下の名馬と言われる西域産の馬が欲しかった。やたらに大宛の汗血馬のことがちらちらした。張騫亡きいま、もう相手になる者はなかったので、それを手に入れるには自分でやるほかはなかった。

武帝は汗血馬を譲って貰う使者を大宛国に派した。併し、この交渉は不調に終った。不調に終っただけでなく、漢の使者はその帰途を襲われて、全員が殺されてしまうという事件が起った。

これを知った武帝は、即刻大宛征討を決意し、これを天下に宣布した。大宛を討つ正当な理由ができた以上、大宛を討つべきであったし、討って汗血馬を手に入れるべきであった。武帝は大宛遠征の総指揮者に李広利なる人物を選んだ。大宛国には弐師城という城があり、そこの城下に汗血馬が養われていると聞いたので、武帝は李広利に弐師将軍という称号を与えた。これに依って李広利の使命ははっきりしたものになった。大宛を討つだけでなく、弐師城の汗血馬を連れて来なければならぬのである。李広利は武帝が最も愛していた今は亡き李夫人の兄であった。武帝は己が寵愛してやまなかった妃の兄を抜擢して、弐師将軍として、大宛征討の栄誉を与えようとしたのである。李広利にとってこの抜擢は有難かったか、有難くなかったか、そのへんのところははっきりしない。妹に似て李広利も亦美貌な青年であった。音楽こそ好きだったが、戦争となると、とんと経験の持合わせはなかった。馬を譲って貰って来る交渉ならできないこともないかも知れないが、武力を以て相手を征服し、その上で馬を連れて来るということになると問題である。併し、武帝の命令である以上、合戦の経験があろうとなかろうと、異族との戦争に出で立たねばならなかった。

李広利が都を進発したのは太初元年（西暦前一〇四年）のことである。志願して集って来た無頼の徒数万、それに異族の捕虜や帰順兵数千を加えた大部隊である。

都を進発し、何十日かの後、部隊は何兵団かに分れ、次次に国境の玉門関をくぐって流砂の中へはいって行った。勿論李広利はその先頭に立って、駱駝の背に揺られているが、やがて何カ月かの後に起る合戦に対してさして成算というものはなかった。部隊の兵隊の数が多いのが唯一の頼みであるが、もともと無頼の徒の寄せ集めで訓練もできていないし、余り統制のとれた兵団は言えない。

支障は玉門関を出た最初の日から起きた。これまでも異族の住む河西の地を過ぎて、食糧と宿舎に難渋して来てはいたが、玉門関を出ると、こんどこそは全くの化外の地であって、聚落という聚落は、どこも漢の部隊に食糧を提供しなければならなぬ義務は持っていない。行軍はいっこうに捗らなかった。食糧の供出を交渉したり、懇願したり、果ては武力に訴えたりして、そんなことで一カ所に何日も費やすことが多かっ

た。中には好意を持ってくれる部族もあったが、兵たちの掠奪行為で折角の好意も忽ちにして敵意に変ってしまうという有様だった。

この漢の西域遠征軍がタクラマカン沙漠の北辺の道を通ったか、南辺の道を通ったか、史書は伝えていない。兎に角一年を過ぎる頃から逃亡兵が目立って多くなってきた。日に何十人もこっそり居なくなることもあった。李広利は毎日のように引き返すことを考えた。今の状態では大宛に行きつくにはこれから何年もかかりそうであった。しかも行き着くだけが目的ではなく、そこで持っているものは合戦なのである。

併し、弐師将軍李広利は決心がつかぬままに更に何カ月かかけて天山に分け入り、漸くのことで郁成という城に辿り着いた。そこは大宛の勢力範囲内で、大宛の兵たちが城を守っていた。

李広利は郁成の城を囲んだ。すぐ攻防戦は展開されたが、城内から討って出て来る大宛兵のために漢軍は戦うごとに破れた。城兵が少ないので、殲滅的な打撃を受けることはなかったが、城を攻略するというようなことは先ず望めなかった。郁成という小城砦でさえ抜くことができない状態なのに、まして大宛国の王都弐師城となると、誰が考えても勝算というものはなかった。そして何よりいけないことは、日々逃亡者が多くなっていることと、食糧事情も急に悪くなって来たことである。このままここに留まっていると餓死者さえ出しかねなかった。

「逃亡者は何人になったか」

李広利は部下に訊いた。

「十人に八人は逃亡いたしました」

「食糧の方は？」

「たいへん窮屈になっております。兵団内で掠奪が行われ始めますと、もう最後でございましょう」

「最後というのは？」

「将軍の生命も危うくなるということであります」

弐師将軍は顔色を変えた。こうなったら引き返す以外仕方がなかった。部隊全部が消えて失くなるより、まだ少しでも残っているうちに引き返して玉門関をくぐる方がましであった。漢軍は城の囲みを解き、夜の闇に紛れてそこを離れた。

この漢軍が一度は囲み、間もなく撤退せざるを得なかった郁成という城砦は、ロシアの歴史学者たちの考えでは、キルギス共和国オシュ州にある現在のウズゲンであろうとされている。当時はユウと呼ばれていたところで、中国の史書はそれに郁成という字を当てたのであろう。ウズゲンは天山の山中にある聚落で、東トルキスタンからフェルガナ盆地にはいるには、どうしてもここを通らねばならない。張騫も大月氏国へ行く時ここを通ったのであろうと思われる。現在も塔や城壁の一部など遺り、サマルカンド的遺跡として知られている。併し、一般の外国旅行者でこの古いパミールの

山中に匿されている遺跡にまで足を踏入れた者はない。筆者も亦そこに立つ夢を果すことはできなかった。

さて、李広利が率いる大宛征討軍が漸くのことで玉門関へ帰還することのできたのは半年ほど先きのことである。この遠征には結局二年の歳月がかかり、兵隊の数は数千に減っていた。

李広利は使者を都に派して、事の次第を奏上した。

——道遠くして食に窮すること多く、且つ士卒戦いを憂えずして餓を憂う。人少なくして、以て宛を抜くに足らず。願わくば、暫く兵を罷めて、益々発して再び往かん。

『史記』に依ると、こういうことを奏したのである。すると、それに対して、何十日かして、都から急使が派せられて来た。急使は玉門関内にはいっていた部隊を全部関外に出させ、それから玉門関を守っている兵で関を固め、その上で言った。

——軍、敢えて入る者あらば、すなわちこれを斬らん。

一歩でもはいってみろ、斬っちまうぞ。

弐師将軍李広利は仕方ないので、玉門関の外に留まった。いつ許しが出るか判らなかったが、それまでは国内にはいることはできないのである。

新たに六万の大部隊が都から到着して、李広利の指揮下に置かれたのは一年後のことであった。こんどは前の部隊とは異って屈強な兵で固められていた。囚人の中で強弓を引く者は、許されてこの部隊に入れられ、辺境の騎兵も亦この部隊に組み入れられていた。兵数六万と号したが、実数はそれ以上あった。自分で食糧を持った従軍者や、私的の従者、部卒は数の中にはいっていなかった。そして兵のほかに、牛十万、馬三万余頭、驢馬、駱駝の類も亦万を以て算う数であった。こんどは食糧も豊富であり、武器も豊富であった。何から何までこの前の寄せ集めの征討軍とはたいへんな違いであった。

しかも、酒泉、張掖といった国境に近い地域には、万一に備えて十八万の兵が配され、征討軍の食糧補給のためには要塞要塞の兵が当てられていた。また征討軍の中には馬について知識を持っている者が執駆校尉として配せられてあった。言うまでもなく、これは大宛から馬を持って来る場合の用意であった。

武帝は周到な計画のもとに大遠征隊を編成し、再びこれを李広利の指揮下に置いた。寵妃の兄に、もう一度名誉回復の機会を与えたのである。

弐師将軍李広利は用意万端なって、装備完全な大兵団を率いて、再び大宛国を目指した。「天下騒動し、伝えて相奉じて宛を伐つ」とは史記の記述であるが、この遠征がいかに国の総力を挙げたものであるかが判る。漢軍は数軍に分れて南北両道より進んだ。

こんどはこの前の遠征とは打って変って、到るところの小国は進んで食を供し、漢

軍の便宜を図った。それほど遠征軍の陣容は異族を圧するものがあったのである。最初の戦闘は侖頭に於て行われた。数日にしてこれを屠った。そして更に西行、郁成の攻略はあと廻しにし、一路王都弐師城を目指した。弐師城に向った漢の前軍は三万である。ここに来るまでに三万になってしまっていたのである。

戦闘は、城より討って出た宛軍を迎えて城外で開始された。漢兵は弓箭兵を主力として大いに敵を破り、忽ちにして城を囲んだ。攻囲四十日、攻防戦は毎日のように繰返された。その間に漢兵は水源を断って籠城軍を大いに悩ませたが、城は容易に落ちなかった。

外城を破ったのは四十余日目であった。この攻防戦で宛の王族で勇将の名の高い煎靡を捕虜とすることができた。城内では王族たちが相謀って宛王の母寡を殺して、王族の一人がその頭を持って、平和交渉にやって来た。——善馬を悉く出すから自由に選び取って宜しい。その代り即時攻撃を中止すること。若しこれを受け入れないならば名馬という名馬はすべて殺してしまい、援軍康居の到るを待って最後まで漢軍と闘うが、如何。

そこで李広利は部下と謀った。康居の援軍が既に到っていることは事実であった。しかも軽視できぬ勢力である。ただ漢軍の勢いが盛んなため闘いをしかけて来ないでいるだけである。

李広利は宛の交渉条件を入れた。こんどの大遠征の本来の目的である汗血馬の譲り渡しは、久しぶりで兵火の収まった城内の大広間で行われた。李広利は善馬数十頭、並みの馬三千余頭をとり、以前漢使を親切に遇した昧蔡を立てて宛王とした。李広利は兵を中城には入れず、そのまま引き返した。

併し、郁成攻略に向った枝隊一〇〇〇は郁成軍の攻撃を受け、その大部分は討たれ、指揮者である校尉王申生は討死した。その報を得て、李広利はすぐ兵団を郁成に派した。郁成王は破れて康居に走ったが、康居人に捉えられ、漢将に手渡された。郁成王は李広利の前に引き出される前に頭をはねられた。

漢軍が大宛国を討ったことは西域諸国を震え上がらせた。漢軍が故国へ凱旋して行く途上、過ぐるところの小国はみなその子弟を軍に従わせた。これはみな人質として漢土に留められる運命を持った。

弐師将軍李広利は大任を果し、こんどは堂々と玉門関をはいった。出発の時六万あった筈の兵は六分の一の一万に減っていた。軍馬は僅か千余匹に過ぎなかった。併し、垂涎おく能わなかった夥しい数の天下の名馬を手に入れることができて、武帝は満足だった。李広利を封じて海西侯となし、この軍に加わった将兵それぞれに気前よく賞を施した。九卿となるもの三人、諸侯の相、郡守、二〇〇〇石の者百余人、一〇〇〇石以下千余人といった具合であった。

さて弐師将軍李広利がその城を囲んで、汗血馬を手に入れた城が弐師城であること

は『史記』の記述に依って明らかであるが、『史記』の記述の中に弐師城のことを宛都と記している箇処があり、そこから判断すると、弐師城は大宛の都であったということになる。

併し、厄介なことは史記と並んで第一級の史書である『漢書』では大宛の都を貴山城と記している。こうなると弐師城と貴山城とは同じであるかという問題も起れば、同じ大宛の都が時代に依って弐師城、貴山城の二様の呼ばれ方をしたのかも知れないという問題も起って来る。或いは二つは全く別のところであるかも知れない。——学者に依って、この問題はいろいろに解釈され、また論争もされて来たが、ここでは弐師城と貴山城が、一応同じ大宛の都であったとしておこう。これは筆者がそう仮定するのでなく、学界でも亦多くの学者がこれを前提に論じているかのように思われるからである。

それにしても、まだ一番大きい問題が残る。一体、それでは大宛の都はどこであったかという問題である。弐師将軍李広利が汗血馬を連れて来た史記の弐師城は、つまり言い方をかえれば、『漢書』の貴山城は、どこにあったであろうか—これは学者だけでなく、私たちにもすこぶる興味ある問題である。今から二〇〇〇年程前天下の名馬を産したところを突きとめることにもなり、その世界的名牧場が今どのように変っているかを知ることにもなる。

この問題は世界の学者たちに依って執拗に論争されて来たが、我が国に於ても桑原隲蔵、白鳥庫吉、あるいは藤田豊八といった学者たちがそれぞれ華々しく論陣を張った。

桑原博士には「大宛国の貴山城に就いて」「再び大宛国の貴山城に就いて」「藤田君の“貴山城及び監氏城考”を読む」等があり、白鳥博士には「大宛国考」、藤田豊八氏には「大宛の貴山城と月氏の王庭」等の論文があり、いずれも大正四年から七年ぐらいの間に発表されたものである。このほかに白鳥博士には明治三十九年に発表された「大宛国の汗血馬」がある。よくまあ、大宛の都の位置を決定するだけのことにこれだけ論じられることがあると思うような論文許りである。そもそも弐師とか貴山城とかいう文字がいかなる音に当てられたものであるかという問題から始り、『史記』『漢書』の記述から、その地形を考え、川の大きさ、位置を考え、他国からの距離を算定し、その上で幻の大宛国の王城を決定しようとする。そうした意味では専門外の者が読んでも推理小説的面白さがある。

コーカンド（那珂通世）、ウラ・チュベ（リヒトホーフェン）、ヒージェント（グートシュミット、三宅米吉、桑原隲蔵）、カサン（ラクペリー、ヘルマン、白鳥庫吉）、こうしたところが、学者たちに依って、それぞれの立場から宛都の故地とされている。白鳥博士は初めはウラ・チュベ説であったが、のちにカサン説に切り替えている。またこのほかにマルギランを挙げる学者たちもある。フェルガナ盆地の地図を描いて、

これらの都邑、聚落を記してみると、汗血馬の故地の候補地は広い盆地全般に散らばることになる。弐師将軍李広利もずいぶん厄介な問題を後世に遺したものだということになる。

それではお膝もとのソ連の学者たちは、今日この問題についていかなる見方をしているか。先年物故した高名な考古学者A・N・ベルンシュタムは、一九四六年にオシュ市（フェルガナ盆地の南側）の北西二五キロのアラワン部落付近において馬の岩壁画を発見し、これを有力な手がかりとして、新説を発表している。

オシュ市からフェルガナ市に到る街道に沿ってアラワン川という川が流れているが、問題の馬の絵はその右岸の岸壁二カ所に描かれてあるもので、上の絵は地上から十五――十六メートルの高さのところにあり、金属製の固い道具を使ったと思われる描き方で、何頭かの野生の山羊と、二頭の雌雄の馬が描かれている。

ベルンシュタムは『中央天山およびパミール・アライの歴史・考古学概説』（一九五二年ソ連科学アカデミー刊）の中で、この岩壁画の馬の外観がモンゴリアや西アジアなどのものとは異ることを指摘して、これこそ中国で謂うところの汗血馬ではないか、そしてまたこの地が馬の繁殖を祈願する信仰の聖地ではなかったかと、述べている。そしてトマシェクやバルトリドの見解に従って、弐師城がクワからオシュに到る間のオシュ河岸にあった考え、廃墟マルハマトをそれに当てている。

またベルンシュタムはマルハマト遺跡発掘の結果を報告し、マルハマトが堅固な城壁に包まれた城で、防禦用の塔を西側に十八、東側に十六、北側に十二、南側に六つ持っており、城内には十六個のテペも見られる。またそこから掘出された遺跡も紀元二―三世紀に属するものであり、中城と外城の存在も確認されると述べている。ベルンシュタムは古代フェルガナの王都弐師城を単に政治的中心地としている。また弐師城と貴山城の関係について、『史記』の時代の都は弐師城（マルハマト）であったが、『漢書』の時代には貴山城（カサン）に移ったものと考えている。

このベルンシュタムのマルハマト説が曾て華やかであった大宛国の貴山城、弐師城論争を打切るだけの価値と説得力を持つものであるかどうかは、勿論専門外の私には判定する資格はない。ただ判っていることは、貴山城、弐師城の位置がどこであるにせよ、それとは別の価値多い研究がこの多年に亙った宛都論争に依って生み出されているであろうということである。

私がフェルガナ盆地に足を踏入れたのは五月の下旬であったが、五月のフェルガナ盆地は日本の春先きの多少肌寒い気候であった。それぞれの学者たちに依って弐師城あるいは貴山城と考えられたクワ、コーカンド、マルギランといった都邑を廻った。クワは石榴の産地として知られた、静かな白い土屋の聚落であった。石榴は外国にも大々的に輸出されているということだったが、石榴の木がそれほど多いとも思われなかった。部落の中心部は賑わっており、道ばたのチャイハチ（お茶を飲む露台）には

老人の姿が多かった。この部落を出たところに烽台の跡があった。半ば崩れている土の固まりで、そう説明して貰わないと、誰もそれが烽台の跡とは思わぬだろう。その烽台の裾に土屋があり、土屋の前に大勢の子供たちが並んでいた。ウズベクともキルギスともタジクとも判らぬ子供たちであった。このあたりは一面の大平原で、桑、ポプラ、チナールの並木が点々と平原のあちこちに見られた。

クワは小さい土屋の聚落であるが、マルギランはずっと大きい都邑であり、みごとな街路樹に縁どられたメイン・ストリートには近代的なビルも幾つか建ち並んでいる。併し、中心部を離れると、ここも亦しんとした土屋の街である。ここのバザールについては序章において記したが、まさに中アジアの心臓とでもいうべきエネルギーに満ちた壮んな眺めであった。平原に散らばっている少数民族のすべてが集っているのではないかと思われるほど、喧噪と混乱を極めたものであった。コーカンドは更に大きい都邑であった。ここはコーカンド王国華やかなりし頃の王城があることで知られており、街の中心部には立派な博物館もあった。

クワ、マルギラン、コーカンドいずれもフェルガナ盆地の古い町々で、世紀前よりの歴史を持っているが、勿論それらの遺跡が残っていよう筈はない。これらの街の様相から、そこに住む人たちまでをすっかり変えてしまったアラブの侵入は八世紀のことであり、モンゴルの侵入は十三世紀のことである。まして世紀前の張騫や弐師城将軍李広利の時代はそれより遥かに遠い昔のことである。若し往古を語るものがあるとすれば、それはすべて土中深いところに眠っている筈である。民族は何回も交替している。大宛国の汗血馬がこの大平原から影も形もなくなり、岸壁に刻まれた何頭かの動かぬ馬になってしまったことに、何の不思議もないであろう。

遠くに白い雪を頂にもった山脈の見えるフェルガナの平原に立って、しっくりと胸にはいって来る思いがあるとすれば、それはやはり人間のことであった。往古この平原のどこかで闘い、たくさんの馬を持ち帰った弐師城将軍李広利のことであった。亡き寵妃の兄として、大宛征討で武帝の期待に応えた李広利は、その後対匈奴戦に将軍として出征する。李広利は衛青、霍去病等と並んで、名将軍としての名を後世に遺すべきであったが、運命はこの人物に味方しなかった。征和二年（西暦前九一年）、彼は二回目の出征の折、陣中で、自分が大疑獄事件に坐して罪を問われているという都の噂を知り、名誉回復を謀って敵軍深く軍を進めたが、こんどは大宛遠征の場合のようにうまくは行かなかった。李広利は匈奴に捉えられ、そして斬られた。大宛遠征より十年ほど経った時のことである。

天山の湖

武帝の命に依って初めて西域に使した張騫は、充分武帝の期待に応えるだけのことをやってのけ、その功に依って博望侯に封じられたり、大行に任じられたり、九卿に

列ねられたりした。張騫は勿論充分満足して死んだが、派手好きな武帝の方は、張騫の歿後、日が経つにつれ、張騫に対する恩賞が必ずしも充分であるとは思わなかったに違いない。大宛の汗血馬を手に入れたのも、もとを質せば張騫の西域報告に端を発していたし、烏孫と結ぶことができたのも、張騫の進言に依るものであり、最初の使節としての彼の烏孫行きに負うところ大なるものがあった。何と言っても烏孫と親善関係を結ぶことに成功したことは、ひとり烏孫だけの問題でなく、他の西域諸国に対する影響を考えると、それはちょっと較べものがないほど武帝の治世における大きな事件であったのである。西域諸国は次々と漢に誼を通じて来、これまでに見たこともない西域の珍貴財宝がどっと漢の都にはいって来た。珍貴財宝許りでなく駝鳥の卵もはいって来れば、奇術師や幻術師もやって来た。胡族たちはそれぞれ隊商を組んで、遠い西トルキスタンの地から天山、パミールの険を越え、流沙を渡って玉門関をはいって来た。後世シルク・ロードと呼ばれる隊商路はこの時代に初めて出来上がったのである。これまた張騫のお蔭以外の何ものでもなかった。

「若し張騫が健在なら、もっと大きく賞するものを——何事も張騫を鑑とせよ」

武帝はよく傍の者に言った。併し、もっと大きく賞するといっても、大行に任じ、九卿に列せしめた張騫をそれ以上に大きく賞することは難しかった。詔勅好きな武帝のことだから、思いきって派手な文句を使った詔勅でも張騫に賜ったかも知れない。

併し、こうした張騫のお蔭で一生を悲歓の中に送った人物がなかったわけではない。江都王の建の女で、名は細君と言った。細君は、烏孫王昆莫が一〇〇〇頭の馬を献じ、漢の公主を貰いたいと申出て来た時、その白羽の矢の立った女性である。公主の降稼ということは、烏孫との親善関係をより強固なものにするために、武帝自身以前より考えていたことでもあった。それに烏孫よりは一〇〇〇頭の馬が贈られて来ている。大宛の汗血馬を手に入れる前のことであるから、烏孫の馬は、武帝としてはたいへんな貰いものであった。公主の一人や二人には替えられない。因みに、この烏孫の馬は後に西極と名付けられ、大宛の汗血馬と区別した。大宛の馬のほうは天馬と呼ばれた。

さすがに公主の輿入れは行装美々しいものであった。都を出、河西廻廊地区の旅を重ねた。が、玉門関を出て、異域に足を踏入れる頃は、公主の輿入れの行列も、さして隊商のそれと変るところはなかった。花嫁の乗る輿を護衛する騎馬隊や駱駝隊が少し多いぐらいのことであった。

公主の一行は行く先々で出迎えを受けた。烏孫までの漢の地にも異族たちは三十何カ国の国を樹てていたが、いまはすっかり漢威に服していたので、異族の襲撃の怖れはなかった。また匈奴も遠く北方に奔っていたので、この方も直接の脅威には曝されていなかった。併し、若い公主の嫁いで行く先は、そうした漢威の行われている地帯の一番西の端であった。嫁いで行くまでは心配はなかったが、嫁いで行ってからは、生活が安穏であるという保証はなかった。烏孫はいつ近隣の他民族と事を構えるかも

判らなかった。そういう烏孫であればこそ、漢から公主を迎えることが必要であったのである。

烏孫は天山山脈北方のイリ川流域、イシククル湖畔、タラス川流域、そういった一帯の地を畜類と共に牧草を追って移動している遊牧民族であった。現在のキルギス共和国の東北部から中国の曾ての新疆省西北部へまたがっている地域である。

――烏孫は大宛の東北二〇〇〇里のところに国を樹てております。人民は一カ所ん定住することなく、牧草を求めて、畜類と共に移動し、この点は匈奴と同じ習俗でございます。弓を引く数万の兵を持っており、以前は匈奴の支配下にありましたが、強大になった現在は匈奴の治下にあるとは名許りで、いっこうに臣属の礼はとっておりません。

張騫が初めて武帝に烏孫という国を紹介したその紹介の仕方は、『史記』大宛伝によると、このようなものであった。既に張騫は他界しているが、その時から公主の嫁いで行くこの時までにさして歳月は経っていない。烏孫という国はそれから大きくなっているわけではなく、小さくなっているわけでもない。

やがて、漢の若い公主は烏孫の王庭に着いた。天山の山ふところにある草原であった。彼女は自分を迎えた烏孫の権力者昆莫の姿を見て驚いた。何歳か判らぬが恐ろしく年齢をとっていた。公主が己が瞼に描いていた昆莫の映像は全く異ったものであった。公主は何回か昆莫という人物についての噂を耳にしていた。

――昆莫は生まれて間もない頃、匈奴のために父を殺され、自分は野に棄てられた。併し、昆莫はすくすくと育って行った。鳥が食物を運んで来、狼が乳を飲ませてくれたからである。これを知って、匈奴の権力者は昆莫を己が幕舎に引取って育てた。普通の人間の子でなく、神の子に違いないと思ったからである。昆莫は匈奴の幕舎に於て、逞しい若者に育った。兵を率いさせると、異常な才能を発揮した。匈奴の権力者は昆莫に、曾て昆莫の父親が持っていた民と土地を与え、匈奴の西辺を守らせた。併し、匈奴の権力者が死ぬと、昆莫は一族を率いて、他の土地に移り、匈奴の束縛を断って独立した。匈奴は昆莫に何回も軍を向けたが、どうしても勝てなかった。そのうちに匈奴は昆莫を討つことを諦めた。普通の人間ではなく、神人に違いないと思ったからである。

昆莫に関する噂は大体このようなものであった。闘えば必ず勝つ武人であり、常に神に守られている神人であった。漢の公主細君が、天山山中の幕舎で見た昆莫はこうした噂とは平そかけ離れた人物であった。老いていることは仕方ないとしても、どこにも神人らしい面影はなかった。赤い髪には白髪が混じり、青い眼は濁っていた。立居振舞はよぼよぼしており、もはや三軍を叱咤する武人らしいところは、どこにも発見できなかった。老人は言った。

「美しき漢の公主よ、汝は今日からわしの右夫人とならねばならぬ。生国を遠く離

れたと言っても、何も歎き悲しむには当らぬ。わしは既に老いている。やがて適当な時期に、わしは汝をわが孫に妻わせてやろう」

昆莫は長子を喪い、その子、つまり自分の孫岑娶に国を譲ろうと思っていた。が、それはそれとして、確かに昆莫の言う通り、漢の公主は彼の孫の嫁たるにふさわしい年齢であったのである。細君は夫である烏孫王が老いていることも悲しかったし、言葉の通じないことも悲しかった。

漢からは絶えず使者がやって来た。ある時、烏孫の若い右夫人は、母国から来た使者の一人に自分が作った一篇の詩を示した。

わたしの家は
わたしを嫁がせに
天のどこかに。
わたしが仕えているのは
異国烏孫の王さま。
まんまるい家
けものの皮の壁
食べものは生のお肉
すするのは饐えたおちち
明けても、暮れても
悲しみで心は痛み
思い出されて来るのは
故国のこと許り。
ああ
鵠になりたい。
ああ
あの黄色い鵠になれたら
高い高い空を飛んで
夢にも忘れない故国に
帰れましょうのに

『漢書』には「吾家は我を嫁す天の一方」とあるが、確かに公主は天の一方に嫁いで来たのに違いなかった。

やがて漢の公主が昆莫の夫人になったことことを知って、匈奴は匈奴で昆莫に女を送って来た。昆莫は匈奴の女を左夫人としたが、これを機として漢の公主の方は孫の岑娶の妻にしようとした。公主にとっては若くても老いていても同じことだった。夫を替えるのは嫌だった。故国の権力者に上書して訴えたが、武帝の諾き入れるところとならなかった。その国の俗に従え。——これが武帝からの返事であった。公主は岑

婆との間に一女を生んだが、烏孫にあること四、五年にして歿した。

公主が亡くなったあと、漢ではさらに楚王劉戊の孫の解憂公主として烏孫に送り、岑娶の妻とした。

さて、それならば、漢の公主が短い生涯を送った天の一方——烏孫の王都はどこにあったのであろうか。『漢書』には公主の頃より少し降った時代の記述に烏孫の都は「赤谷城」という名で出て来る。「烏孫を討ち、深く入って赤谷城に至る」とか、「赤谷城東に寇す」とか「北道に従って赤谷城に入り烏孫を過ぐ」とか、そういう書き方で赤谷という城名や地名が現れる。が、その肝心の位置となると、短い文章からは見当が付かないが、学者の間ではイシククル南岸、あるいはナリン川渓谷と、いろいろな説がある。いずれにしても漢の公主が言ったように天山の内ふところに位置した天の一方であったのである。そしてイリ河谷沿いにイシククル湖畔へ出るシルク・ロードは赤谷城を経由して西に通じていたのである。

私はキルギス共和国で、イシククル湖畔を走るシルク・ロードに沿っているフルンゼ、トクマク二つの地点に立った。フルンゼもトクマクも天山に源を発するチュー川の形成するチュー盆地に位置する都邑である。フルンゼの街からは天山山脈の一つであるアラトウ山脈の雪を戴いた姿が、すぐそこに見えるが、トクマクまで行くと、チュー盆地はすっかり平原の様相を帯びて来る。そして三五キロほどで、平原は雪の山脈で打ち切られ、道はアラトウ山脈の山ひだに分け入って行く。その山脈の向こう側にイシククル湖はあるのである。イシククル湖は、キルギス共和国で私の一番行きたいところであったが、ここも亦南道のウズベクと同じように、一般外国旅行者はそこに足を踏入れることを目下のところ諦めるほかはない。考古学者以外に用のないところであるので、私たちはトクマクまで来たことで満足しなければならなかった。

イシククル湖畔からトクマクへかけての往古の隊商路ほど中央アジアの民族が興亡の歴史を繰り返している場所はない。烏孫は匈奴に代って登場する鮮卑、鮮卑に代って登場する柔然という遊牧民族それぞれの侵略を受け、やがて西方のパミールに移り、史上から全く姿を消すことになる。五世紀のことである。烏孫の故地がどこであるか判らないのは当然である。烏孫に代ってこの舞台へ登場する民族は、それぞれに適当な時に史上から引込んで行くが、それぞれにまたその故地を、それが神から課せられた任務である如く判らなくしている。

現在イシククル湖の底には一つの都が沈んでいると言われるが、その都もいつの時代のものか判らない。あるいは一つでなく、いろいろな時代の都市や聚落が沈んでいるかも知れない。それについては後述することにして、それでは一体烏孫はいかなる民族であったろうか。これも亦判っていない。ソ連の一部の学者は烏孫をグレコ・バクトリア王国を滅ぼしたスキタイ系の「アシアン」人と同じであると考えている。これは烏孫をイラン系の民族とする考えである。併し、別の学者たちは匈奴の一枝族と

見做してトルコ系の人種であったと見ている。現在では後者の方が有力であるということである。

漢の公主細君がイシククル湖畔の王都で薄幸な短い生涯を終ったのは紀元前一世紀のことであるが、それからこの地域の六、七百年間のことは詳しくは判っていない。中国の勢力が天山山脈の向こう側まで及んだ時代もあれば、玉門関を閉じて西域経営をすっかり諦めてしまった時代もある。武帝が開いた西域への道は、賑やかな東西交渉路としての役割を果した時もあれば、土民のほか誰も通らぬ全くの荒蕪地と化してしまった時代もあった。その間にも中央アジアには民族の興亡は続けられている。東トルキスタンのタクラマカン沙漠周辺の小さい国々は、南道沿いの国も、北道沿いの国も、互いに相争い、割れたり、併わさったり、亡んだり、興ったりしていたのである。天山の向こう側の西トルキスタンに於ても亦同じであった。烏孫といった国は影も形もなくなり、六世紀には突厥という強力な遊牧国家が出現し、その全盛時代が七世紀の中頃まで続いている。

この突厥の時代に、イシククル湖畔を唐僧玄奘が通り、中国人として初めてこの天山の山ふところの湖について記している。

玄奘というのは『西遊記』で有名な三蔵法師である。玄奘は名は褘と言い、河南省の洛陽東方の村の陳という家に第四子として生れたが、生年については判っていない。西暦五九六年、六〇〇年、六〇二年と、いろいろな説がある。玄奘の生涯と事蹟については『大慈恩寺三蔵法師伝』と、『続高僧伝』に収められている。『唐京師大慈恩寺釈玄奘伝』に依って知ることができるが、生年はこの二つにおいても異っている。

『三蔵法師伝』に依ると、玄奘は十三歳の時出家して洛陽の浄土寺にはいり、十七歳の時長安に移ったが、一年で四川省成都に居を変えている。当時成都は地方都市としては一、二の大きな存在で、学芸も亦盛んであった。居所を転転としたのは、隋が亡び、唐が国を樹てる動乱期に当たっていたので、玄奘は落着いて勉学に励めるところを次々に求めて行ったのであろう。そして二十一歳の時、成都を飛出し、あとは高僧名僧を求めて各地の寺々を遍歴し、再び長安にはいった時は、すでに高僧としての玄奘の名は世に高くなっていた。どう考えても凡人ではなかったわけである。

二十六歳の時、この秀才青年は西遊を志し、時の政府に願書を出したが許可にならず、ついに貞観三年（西暦六二九年）に、法を犯して国外へ脱出することを決意した。玄奘は仏教の本場である天竺（インド）に赴いて、釈迦の生れた土地を見たかったし、まだ見たこともない経典の山の中にもはいって行きたかったのである。

玄奘の前に中国から西域を経て、インドへ渡った渡印第一号は四世紀末の法顕である。法顕は十五年目に帰国して、『仏国記』を著している。反対に同じ頃インドから中国へやって来たのは羅什である。少し時代が降って六世紀になると達磨がある。中国と印度とは、こうした仏教の僧侶たちの法を求めんとする、あるいは法を弘めんと

する精神によって、幾多の高山大河に隔てられながらも、辛うじて細細とつながっていたのである。

玄奘は天山を越え、西トルキスタンに出て、インドへ赴いたが、十数年に亙るその長い旅の経過は、玄奘が帰国後一年にして脱稿したと言われる『大唐西域記』によると、玄奘の西遊は恐ろしく苦難に満ちた旅であった。併し、この国外脱出者の高僧としての噂はすでに西域の異民族の間にも伝わっていたらしく、玄奘は方々で歓迎されたり、援助の手を差しのべられたりしている。とは言え、言葉も判らず、人情も風俗も判らぬ国々を次々に経廻って行くのであるから、その労苦のなみ大抵でないことは当然である。玄奘は高昌国、阿耆尼国、屈支国、跋禄迦国といった西域北道に沿った小国を通過し、天山へはいって行く。天山の一支脈である凌山を通過する時ははいへんであった。

——国の西北より行くこと三百余里にして石磧を渡って凌山に至る。これ則ち葱嶺（パミール高原のこと）の北原、水多く東流す。山谷の積雪は春夏も合凍す。時に消泮することありと雖もついでまた結氷す。経途は険阻にして寒風は惨烈なり。暴竜の難多くして行人を陵犯す。この途による者は衣を赭くし、ひさごを持ち、大声に叫ぶことを得ず。微かに違犯するあれば、災禍目のあたりに見る。

こういった高い調子の旅行記である。暴竜の難が多いというその暴竜とは何のことであろうか。竜巻のことでであろうか。併し、風のことは風ののことで別に書いている。

——暴風奮発、沙を飛ばし、石の雨をふらし、遇う者は喪没し、生を全うすること難し。

この凌山越えで、実際に玄奘は同行した従者や牛馬の多くを失っているので、必ずしも表現がオーバーであるとは言えないようである。惨憺たる苦難の泊りを幾つか重ねて、やっと凌山を越えると、玄奘はそこにイシククル湖の美しい湖面を見た。湖面が美しいのは一瞬のことで、どうしてひとすじ縄で行く相手ではなかった。勿論玄奘の頃はイシククルとは呼ばれていなかった。玄奘は大清池と呼んでいる。

——山行四百余里、大清池に至る。あるいは熱海と名付け、また鹹海と謂う。周千余里、東西長く、南北狭し。四面山を負い、衆流は交湊す。色は青黒を帯び、味は鹹苦を兼ねたり……竜魚雑処霊怪はしばしば起る。ゆえに往来する行旅は禱って以って福を祈る。水族は多しと雖も敢て漁捕する者なし。

ここにはしばしば霊怪が起ると記してあるが、この霊怪なるものの正体も亦判らない。併し、これを玄奘がいい加減なことを書いたとするわけにはいかない。イシククル湖が熱海と呼ばれているのは不凍湖であるためであり、鹹海と謂われていたのは水が塩分を含んでいるからである。

玄奘はイシククル湖畔を過ぎ、なおアラトウ山脈を越えたり、チュー川に沿ったりし

て、チュー盆地へ降りる。するとそこに突厥の都邑である素葉城があった。「清池西北行五百余里素葉水城に至る」。玄奘は簡単に記している。

素葉城の地は、現在のトクマク付近とされている。湖畔からトクマクまで都邑はなかったのである。烏孫の時代にあったその王都赤谷城のことはどこにも記されていない。漢の公主が王の妃として、更にまたその王の孫の妃として何年かを過ごした赤谷城は、玄奘の頃は影も形もなくなっていたのである。凌山の暴竜の為せる業か、あるいは大清池の霊怪の為せる業なのであろう。

さて、玄奘の着いた素葉城は当時突厥の権力者の幕営地であった。

——城の周は六、七里ありて、諸国の商胡は雑居せり。

……素葉已西に数十の孤城あり。

と『大唐西域記』は記している。ここから西方には遊牧民族の帳幕が点々と散らばっていたのであろう。玄奘は素葉城で突厥の可汗（王）に会っている。身は緑色の綾の袍を纏い、額に一丈ほどの絹布をまいて背後に垂らし、頭髪は露わにしている。そして随う従者たちは二〇〇人はみな錦の絹を着、頭髪を編んで左右に垂らしていた。

烏孫の赤谷城はなくなっていたが、その代りに突厥の素葉城がこの地帯で最も殷盛を極めていた聚落であったのである。現在キルギス共和国には八十の民族が雑居していると言われているが、その頃も今と同じように民族の数は多かったのであろう。「諸国の商胡は雑居せり」というのは今も昔も変っていないのである。

玄奘は、ここからサマルカンドを経て、アフガニスタンにはいり、ヒンズークシ山脈の渓谷からバーミアンへと抜け、それから目的地インドへ向っている。そしてインドで高僧として有名になり、往路に劣らぬ苦難の旅をして、母国に辿り着いた時は四十歳を越えていた。

帰国の時は玄奘はたいへんな迎えられ方であった。玉門関にはすでに都から出迎えの役人が派せられており、そこから都まで行列は日々その数を増した。玄奘は長安で九十余歳で歿するまでの余生を自分がインドから持ち帰った経典の翻訳の仕事に捧げている。

玄奘は葱嶺を越えて、大清池畔へ出、素葉城を経て、サマルカンド方面へ向っているが、今日の地図で言えば、玄奘は天山のベデ峠を越え、キルギス共和国のイシククル湖畔へ出、トクマク付近の突厥の王都を経て、サマルカンド方面へ向ったということになる。イシククル湖からトクマク、フルンゼ方面へかけて一帯の地が、往古の東西交渉路の重要地点であったことだけは確かである。そしてこの東西交渉の商業路は、ずっと時代が降るまで大きい役割を果し続けている。玄奘が通過してから約半世紀経った頃は、唐の勢力はこの方面まで及び、唐軍は西突厥の手から素葉城を自己の手中に収め、砕葉鎮と呼ぶ大きな城を築いた。唐の軍勢はその後更に半世紀ここに駐屯するが、ここには中国人も居れば、突厥人も居り、また西方の諸民族もはいり込んで、

国際的大都市を形成していたものと考えられる。そして時代が下るにつれ、素葉城とか砕葉鎮とかいった名前はいつか史上から消え、新しくこの地帯の支配者として現れてくるトルコ系の王朝、カラハン朝の首都としてバラサグン（裴羅将軍城）という都邑が登場して来る。このバラサグンの繁栄は十世紀中葉から十四世紀まで続いているが、これまで学者の間ではトクマク付近の地と目され、現在ロシアの考古学者たちに依って掘られているアク・ベシムの遺跡をそれに当てている学者もある。

私たちがキルギス共和国の首都フルンゼからくるまでトクマクへ向ったのは五月の中頃であった。往古の素葉城、砕葉鎮、バラサグンなどのあったトクマク付近一帯がどのようなところか見てみたくもあったし、アク・ベシムといところの遺跡にも足を踏入れてみたかったのである。

フルンゼの町から雪を戴いた天山の前山であるアラトウ山脈は指呼の間に見える。松本から見る日本アルプスの山山ぐらいの大きさである。そのフルンゼの町からその雪の山脈へ向って、くるまを走らせる。トクマクはフルンゼから七五キロで、ゆっくりドライブして二時間の距離である。ゆるやかな段落を持ったチュー盆地がどこまでも拡がっている。平原にはポプラと柳が多く、いずれも見上げるような大樹許りである。耕地は麦畑、それに草原が並んでだんだら模様を作っている。道は点在する小さい聚落を縫って走って行く。

トクマクは白壁の家の多い静かな街であった。街の周囲には草原が拡がり、街の内部は大樹木で埋められている。どこへ行っても大樹老木の繁みで、街は多少暗い感じである。その静かな街の路地路地を白いものが舞っている。ポプラの種子であった。街のたたずまいも、街の人たちの表情も、全く歴史というようなものと無関係である。この国が八十の民族を持つという一事だけが、この街が過ぎて来た歳月の長さを思わせるものである。

トクマクからアク・ベシムに向う。遺跡はスタラヤ・ポクロフカ村南西五キロの地点にあり、付近一帯は高原風の草原で、洪水のあとのように道は荒れており、くるまは崖を降りたり、崖を登ったり、小川を水しぶきを上げて渡ったりして、草原の斜面をじぐざぐに上って行く。

発掘現場の近くでくるまを降りる。見渡す限り美しい草原の拡がりである。ここから三五キロの地点で平原はアラトウ山脈に依って断ちきられるというから、すぐそこに雪の山が覆いかぶさっている筈だが、あいにく曇っていて山脈の姿を眼にすることはできない。平原には何カ所かにだんご型の丘が散らばっている。どれも遺跡であるが、現在掘られているのはその中の二カ所だけで、いずれも寺院あとである。城壁、烽台のあともあるが、寺院以外はまだ手をつけられていない。城壁の土の盛上りはそれをずっと眼で辿って行くことができるが、それが囲んでいる地域はかなり広いものである。全部掘られたら、いかなる聚落が現れて来るだろうか。そんな思いを以て眺

める。ここから掘出されたものの一部はエルミタージュ博物館に、一部はフルンゼの博物館に並べられている。

この遺跡がカラハン朝のバラサグンであるか、どうか。一番の興味はこの問題だが、ロシアの考古学者たちの間でも意見は二つに分れている。バラサグンであるという見方をしている学者もあるが、強く否定している学者もいる。

バルトリド、ベルンシュタムは、バラサグンを今日のアク・ベシム城であると考えている。併し、この遺跡の発掘に当ったL・キズラソフはバラサグンとアク・ベシムを同一視することに反対している。バラサグンは資料によると十四世紀まで存続しているが、アク・ベシムの遺跡からは五一十世紀の遺物しか出ていないからである。そしてアク・ベシムからは五キロ南東にあるブラン城址をバラサグンに当てる説もあるが、キズラソフはこれにも反対している。バラサグンはカラキタイ（西遼軍）によって十六日間包囲され、四七、〇〇〇人のイスラム教徒が殺されているが、ブラン城址は小さくて、到底これだけの人数を収め得る城ではないからである。また最近アク・ベシム城址こそ玄奘が記している素葉城であるとする見解が、イギリスの学者クラウソンによって提出され、ソ連の学者クリャシュトルヌイもこれを支持している。

天山の山ひだ深くに匿されているイシククル湖は、玄奘が通過した後も決して歴史とは無縁ではなかった筈である。八世紀のアラブの侵入、十三世紀のモンゴルの侵寇、さらに降るとチムールの大兵団の移動がある。次々に異った民族が、中央アジアの征服者としての姿を、イシククル湖の湖面に映して来る。またこうした大侵略兵団の到来の間々を縫って、前述したように中国兵が湖畔を通過する時代もあれば、カラハン朝を初めとするこの地帯の征服者たちがその時々の誇りやかな姿を湖畔に現わした時代もある。そしてその度に、イシククル湖の湖畔には都市や聚落が建設されたに違いない。大きな都邑もできていたかも知れないし、小さい聚落がちらばっていたかも知れない。併し、そうしたことの詳しい記述はない。

多少詳しくイシククル湖が紹介されたのはアラブの時代、それに次いでは十四世紀のチムールの時代であって、チムール時代の文献に依ると、湖畔には定着生活を営んでいる聚落が点々としてあり、美しい草花が咲乱れ、果樹栽培が行われ、湖上には島があって、王宮が築かれていたという。そしてチムールも屡々軍旅の疲れを、この天山山中の湖の城に医しにやって来たというようなことが記されているが、果してそのような事実があったかどうかは判らない。チムールの軍隊がこの地方を通過したことだけは間違いないが、総帥チムールが自らこの地方に足を印したかどうかは疑問とされている。併し、湖上に島があったことと、そこに城が築かれたということの方は事実と見ていいようである。

ただ面白いのは、十五世紀に存在し、十六世紀にも存在したに違いないと思われる

その島も、城も、これまたいつか影も形もなくなってしまっていることである。十八世紀の前半に、ロシア人は初めてこの地方に進出するが、その記録にはイシククル湖畔には僅かのキルギス人が遊牧していることが記されているだけである。そしてその時作られた地図には島は記載されていない。

十九世紀中頃からロシアの探検家がこの地方に足を踏入れ始めるが、その中でも有名なのはセミョノフ・チャンシャンスキー、フルジェワリスキー等である。プルジェワリスキーは第一回のモンゴル旅行、第二回のロプノール探検、第三回のチベット踏査、第四回のゴビ・青海遠征を経て、第五回のチベット探検の途次イシククル湖岸の町カラコル（今のプルジェワリスク）に於て歿するが、プルジェワリスキーは何回もイシククル湖岸の道を通って天山を越えたのであろう。彼はその遺言に依って、イシククル湖岸に葬られた。

我が国に於て西域探検家として最も有名であるスウェン・ヘディンもイシククル湖畔に足を印している。その著『さまよえる湖』の中に、彼がイシククル湖畔でプルジェワリスキーの墓に詣でたことが記されている。プルジェワリスキーが己が永遠の眠りの地をイシククル湖畔に選んだという一事を以てしても、そこがいかに探検家にとって魅力多い場所であったかが判る。

天山に関する地理学的研究で不朽の業績をあげたセミョノフ・チャンシャンスキーもイシククル湖畔を度々通過したことであろう。セミョノフにとっても、プルジェワリスキーにとっても、ヘディンにとっても、イシククル湖は、どうしてもそこを通過しなければならぬ東トルキスタンへの足がかりであり、大遠征旅行の重要な一基地であったのである。併し、そのイシククル湖そのものの異変については、この偉大な探検家たちも思いを致すことはなかったであろう。大天山が、あるいは天山の向うの未知の世界が彼等を大きく読んでいたからである。

併し、この三人の大探検家も、あるいはイシククル湖畔の住民たちから、この地方に伝わる伝説の幾つかを聞く機会を持ったかも知れない。

その伝説というのはなかなか面白いものである。――昔、いま湖になっているところは美しい平野になっていて、平野には幾つかの町が繁栄していた。人々は平和に豊かに生活していたが、ある時一人の魔女がやって来て、町の人たちをすっかり墜落させてしまった。天山山中の静かな美しい街は、忽ちにして淫蕩な騒がしい町に変った。これを見てすっかり腹を立てた神は、一夜にして町を水びたしにし、一帯の地を今日見るような湖にしてしまった。

また、こういう伝説もある。――いま湖になっているところに、昔一つの町があった。町の人たちは平和に楽しく暮していた。この町のただ一つの欠点は泉が一つしかないことで、町中の人は毎日のように壷を持って、泉に水を汲みに行った。泉には鍵

を預かる聖者がいて、人たちはその鍵番の聖者から鍵を受取って、泉の水を汲み、汲み終ると、泉に鍵をかけ、再びその鍵を聖者に返す掟になっていた。ところが、ある時、ひとりの娘がこの掟を守らなかった。彼女は水を汲んだあと、恋人と愛の囁きを交すのに夢中になってしまって、鍵を鍵番の聖者に返すことを忘れてしまったのである。恋人たちが鍵のことを思い出した時はもう遅かった。泉からは水が噴き出し、もうどんなことをしても、それをとめることはできなかった。見る見るうちに町は水びたしになり、何日もたたないうちに、町は水の底に沈んでしまった。

この地方には同じような伝承が幾つかあるが、どれも町の瞬間的破局を物語るもの許りである。

付録 2：訳文

《西域物语》——井上靖

序章

从学生时代开始我就向往着有一天可以去西域看一看。在那个年代这种想法无疑是异想天开。“西域”其实是一个很模糊的说法，常见于中国古代的史书典籍。最初是中国将其西部地区其他民族所居住的地方统称为西域。所以古时的印度和波斯也曾是西域的一部分。总而言之，中国人会把本国以西的那片各国民族居住的广阔的未知地带统统称作西域。所以西域一词本身就充满了未知、梦幻、神秘、冒险的色彩。又经过了一段时间，印度和波斯不再属于西域，从那以后西域一词用来专指中亚地区。这里到处都充斥着未知、梦幻、神秘、冒险的色彩，历史上各种民族斗争也在这片广袤无垠的沙漠上接连上演。虽然现在各国之间已经有了明确的国境线，商队也不能再像以前那样自由地穿梭在城镇和绿洲中，但只要它还被称作西域，它就永远不会失去未知、梦幻、神秘、冒险的色彩。我现在把这里称为中亚，但其实这也是一种很模糊的说法，因为并没有明确表示出它的范围。就暂时把这里看作是亚洲大陆中部没有出海口的内陆地区，东起戈壁沙漠西至里海的这片广阔区域吧。

自古以来中亚以帕米尔高原为界，东边是东突厥斯坦，西边是西突厥斯坦，按现在的政治概念来划分的话，东突厥斯坦的部分隶属中国，而西突厥斯坦一侧则属于苏联。东突厥斯坦一侧现在属于中国新疆的维吾尔自治区，因为这里目前还没有对游客开放，所以我对这里的情况并不是很清楚，但是苏联所管辖的西突厥斯坦已经完全不是以前的样子了。这里建立了哈萨克斯坦、乌兹别克斯坦、吉尔吉斯斯坦、土库曼斯坦、塔吉克斯坦五个共和国，曾经的绿洲城镇摇身一变，成了高楼林立的大都市。寸草不生的沙漠上建成了好几条运河，运河流域也变成了美丽的绿化地带和耕地。我想中国那里的东突厥斯坦或多或少也会一些变化吧。虽然这里还叫做西域，但实际上已经发生了翻天覆地的变化。不过有些地方却还是老样子。虽然建成了几排绿化带，但是沙漠依旧是沙漠，那里仍然是一片不毛之地；阿姆河和锡尔河还在那里静静流淌；天山和帕米尔高原上终年白雪皑皑的 6000 米的高峰仍然在窥视着天空。那里的少数民族还一直保留着他们的语言和风俗习惯。

还有一点也没有变。那就是历史，承载着过去的历史。历史是永远都无法改变的。这和日本国内的战争不一样，这是民族间的争斗。从结果来看，它会造成民族迁移，也会对该民族的文化和宗教产生影响。回顾西域的历史，它既遭受过以亚历山大大帝为首的阿拉伯的侵略，也遭受过蒙古的侵略。无法选出什么是最大的影响因素，反正每次侵略都会让西域发生翻天覆地的变化。时至今日，所到之处都还能看到战争席卷后留下的痕迹。阿拉伯留下的，蒙古留下的。经历了漫长的岁月，这些历史的碎片已经被掩埋在

黄土之中，多数都不为人所知。时至今日对我来说中亚这片广阔的地区就是“西域”，是一个充满了未知、梦幻、神秘、冒险色彩的地方。尽管近代文明的发展可能会让这里变得面目全非，但它又岂会这么容易就被改变。

我曾两次踏上前往西突厥斯坦的旅程，一次是三年前，也就是 1965 年，还有一次就是今年（1968 年）。在第二次旅程中我到达了在西域历史上十分重要的撒马尔罕、布哈拉、塔什干等城市；阿什哈巴德、乌尔根奇、希瓦等沙漠之城，另外还有帕米尔高原山谷中的新城——杜尚别；史记中所载大宛国——现今已分散为费尔干纳盆地上的几个城市，安集延、马尔吉兰、浩罕、费尔干纳；还有在玄奘法师所著《大唐西域记》和《大唐大慈恩寺三藏法师传》中出现过的天上山脚下的托克马克、阿克别希姆、伏龙芝等地。

这次旅行最让我开心的就是研究和回顾那片土地的历史。我不是历史学家也不是历史研究员，所以我所认识的历史难免会有些片面，我能做的就只是从我现有的知识中找出与这片土地相关的内容。当我带着脑海中那些零碎的历史记忆踏上这片土地，那些历史的碎片仿佛重新焕发出新的生机。

在这次西突厥斯坦之旅中，我亲眼见到了近期由苏联的考古学家挖掘出的三个遗址。一个是彭吉肯特遗址，在 1200 年前，这里曾经是粟特人居住的地方。由于不堪忍受阿拉伯的暴政，粟特人便离开了这里，之后这里就渐渐被黄土掩埋。还有一处就是现在刚刚开始挖掘的阿克别希姆遗址。那里是同一时期游牧民族所居住的地方。最后一处就是古代撒马尔罕古城的长眠之地——阿夫拉西雅普遗址。

在亲眼目睹了三大遗址后，我最深的感受就是，这些地方有着一种难以形容的美。那里到处都是一望无际的高原，无论你站在哪里都可以瞭望到白雪皑皑的天山。所以如果站在那三座出土的古城的正中间，就会发现它们十分相似，几乎无法区分。古时的游牧民族被其他民族追赶，不停地变换居所，而他们的扎营地就像事先商量好的一样，都选在了景致雄伟壮观之处。

如果我是一名历史学家，我一定能从三处遗址那里找到好多宝贝。但我是一名小说家，我不具备那样的知识和技能。我只是惊叹于这里的美丽，同时也深深地感受到，以粟特人为代表的游牧民族的民族生命力远远超乎我的想象。今后如果在史书上看到粟特人或是塞种人的话我想我一定会有不同的感受。

另外我也看到了好几处 Taki。Taki 有拱门的意思，也指由几个圆形屋顶组成的集市。它通常会出现在大的十字路口，而现今保存最完好的 Taki 在布哈拉和希瓦。在布哈拉有这样一种集市又叫做宝石市场。那个商业街正好坐落在一个十字路口上，上面是一个很大的屋顶，路口处比较宽敞，在高高的屋顶上有几扇天窗，阳光就从那里照进来，但建筑内部却非常昏暗。当然现在这里已经没有店铺了，至于 Taki 呢，被完整地保存下来了。这里不愧是宝石市场，看上去确实像是商人们买卖宝石的地方。商人们千里迢迢带着商队穿越沙漠而来，手里攥着宝石走进昏暗的室内商店。黑暗之中商人们的眼睛闪烁着奇特的光芒，手上的宝石也散发着奇异的光芒。一想到集市内部龙蛇混杂人头攒

动就觉得那里是一个奇特的地方。那里的人们语言、穿着、肤色、发色都不一样。（人们）就在这样的集市内部对宝石进行鉴定和估价。当然，比起阳光刺眼的户外，宝石交易这种买卖还是在昏暗的室内店铺里进行更为合适。

位于希瓦的集市并没有设立在十字路口。那是一条笔直的商业街，就好像是在隧道内的两边排列着两行商店。这里不是宝石市场，而是奴隶市场。这里并不是专门的奴隶市场，只是偶尔会进行奴隶的买卖。比起布哈拉的集市这里要稍微明亮一些。这条隧道商业街的中央有一扇小门，从那里可以通往商队的驿站。商队住宿的驿站是围绕着广场建的，中间的大广场供商人们停放骆驼。

据说在乌兹别克斯坦共和国境内只有这两处保存完好的 Taki 了。正因为亲眼看到了这些我才对商队这个词有了些许印象。商人们带着几十匹骆驼进入沙漠，进入街市入口附近设立的驿站。驿站门口停满了骆驼。商人们就这样在小屋里听着骆驼的叫声入睡。第二天一早商人们就要穿过骆驼群去往室内市场。宝石容易携带是最方便进行买卖的，所以商人们每个人手里都握着宝石。当然这些宝石有真的也有假的。而宝石在黑暗中散发出的光芒往往就决定了它的价值。

还有一个集市是住民集市，是在沙漠中生活的住民们买卖生活必需品的地方。这个集市里都是摊贩。而最让人瞠目结舌的集市莫过于费尔干纳盆地上的马尔吉兰古城的集市了，（比起布哈拉、撒马尔罕等地方的集市，这里显然更热闹一些）。据说在费尔干纳盆地上聚集了五十个民族的人们。这里的人们服饰、面孔、语言各异，我险些以为在费尔干纳盆地上的居住的五十个民族都派了代表到集市里去。马尔吉兰是一个安静古老的城市，只有这个地方聚集着一大群人，无论男女老少都在这里进行买卖，为了生计大声吆喝。那里售卖的东西更是琳琅满目。大到驴、马等牲畜，小到种子、粉末。这里真不愧是中亚的心脏。我猜这个集市从古至今一直都是这样热闹吧。

中亚古城中的回教寺庙的顶部就像约定好了似的都是蓝色的。和天空的蓝色海洋的蓝色都不一样，那是一种能勾魂摄魄的深蓝色。如果沙漠中的旅行者或是在沙漠中居住的人哪天没有看到这个蓝色的话就会活不下去吧。恐怕是为了让沙漠中的人能好好活着而特意采用的吧。沙漠中的旅行者从远处看到这个被蓝色陶板包裹着的塔顶，然后就被它所吸引从村落的城门走进来。

锡尔河和阿姆河是中亚地区最有名的河流，自古以来一直被视为沙漠河流的代表。在锡尔河的上游也就是费尔干纳盆地附近，河水的水量非常丰富。费尔干纳盆地上棉花田从附近几条运河取水，而这几条浇盖田地的运河又都是从锡尔河引水的，所以锡尔河的水量可想而知。不过，在克齐尔库姆沙漠的角落处我亲眼看到了锡尔河的下游，不可思议的是，那里的水量非常的少。河水在向下游流动的过程中一点一点地被沙漠吸走，在阳光的照射下蒸发，被流域内的树木吸收，所以水量越来越少，整个河道也变窄了。阿姆河的下游也是同样的状况。一般情况下河流是越到下游汇集的河水越多相应的河面就越宽，而沙漠中的河流却刚好与之相反，越到下游河道越窄小。

发源自天山的泽拉夫尚河在该流域的绿洲地带流经彭吉肯特、撒马尔罕、布哈拉等城市，但它的下游却慢慢消失在了沙漠之中。是真的消失了吧。这是沙漠中的河流都无法逃脱的命运，但是我一直都不敢相信真的会有河流在沙漠中消失。为了避免泽拉夫尚河的水量在流经沙漠中被减少、甚至消失，乌兹别克斯坦共和国现在已经对其采取了保护措施，把泽拉夫尚河的水汇集起来建造了一个非常美丽的人工湖。

大宛的汗血宝马

对于中国古代历朝历代地天子来说，最难处理的问题就是匈奴政策了。从公元前四世纪末到公元三世纪的500年间，这个国家一直与中国密切相关。也正是因为这个彪悍的北方的游牧民族，才使得中国的历史如此丰富多彩。举世闻名的万里长城是为了防范匈奴才建造的，王昭君的悲剧也是匈奴怀柔政策的产物。就连汉高祖都曾被匈奴的军队包围，命悬一线。

历代天子软硬兼施，出台了各种各样的政策，而最积极地展开攻势将匈奴暂时从边境驱逐出去的就是汉武帝了。在与匈奴的战役中立下赫赫战功的卫青、霍去病等人也是因此而留名青史。也是在汉武帝时期，联通西域这件事确实如史书所载，是东西交流史上的一件具有划时代意义的大事，这也可以说是多亏了匈奴吧。

一天，匈奴的俘虏说："匈奴的单于（掌权者）攻打月氏，杀了王，用他的头骨做成酒杯，然后用那个杯子来喝酒。听说知道此事的月氏族人发誓从此与匈奴不共戴天，虽然想和别国联手对抗匈奴，但偏偏找不到愿与他们联手的人，满腔愤懑。"

这个俘虏说的话辗转传到了汉武帝那里。汉武帝认为自己就是那个能与月氏联手的人。汉武帝决定的事当然要马上实行。于是即刻昭告天下要寻找能出使月氏的人。但是，月氏这个国家到底是一个怎样的国家，到底在多远的地方呢，根本没有人知道这些。只是模糊地知道在大汉的西面有月氏这么一个国家而已。玉门关是通往西域的门户，一旦走出这道门，就是那片一望无际的被称为西域的未知地带了。这就是他们所了解的全部。没有人知道它到底在多远的地方。

几天后应征人员的名单做好了。 都是一些不知生死的莽撞之人，什么身份啊经历啊也都不一定是真是的。这其中有一个人是以"郎官"的身份参加应征的。这个"郎官"，就是在宫中做事的官吏。 此人叫做张骞。汉武帝得知此事立即下令召见他。

"朕听说你想出使月氏，关于该国你都知道些什么？"汉武帝问道。

"臣一无所知" 他回答道。张骞三十出头身体健壮，眼睛很大，看上去是个意志坚强的人。

"你预计要多久才能回来？"

"臣不知"

"那你可知你可能不能活着回来了"

听到汉武帝这样说，张骞回答道。

“也许吧，臣虽然害怕但既然是圣上的旨意，总要有人来完成。比起其他人，臣认为自己更能胜任这一任务。”汉武帝对他的回答甚是满意。

于是张骞带着一百多名随从踏上了前往西域的未知之旅。

无法确切得知张骞的年龄，也不知道他是哪一年踏上西域之旅的。《史记》和《汉书》中都没有关于此事的记载。但据《资治通鉴》一书记载的内容推断，他出发的那一年应该是建元二年（公元前 139 年）。

张骞的西域之旅历时 13 年。在汉武帝快要将此事遗忘的时候，张骞带着匈奴女人和随从回来了。那个匈奴女人是他的妻子。张骞诉说了他这十三年来的生活。他刚出玉门关就被匈奴俘虏了，在那里生活了十年，娶了妻子生了孩子。趁匈奴守卫松懈时带着随从逃了出去。之后在沙漠中辗转各国，终于找到了目的地大月氏国。张骞到达那里时大月氏的王已被匈奴杀害，太子继承了王位。新王完全不想再与匈奴作对，更没有想过要与大汉结成军事同盟。张骞在大月氏国待了一年多才启程回国，却在归国途中又不幸被匈奴所俘，吃尽苦头。

虽然没能与大月氏国结成军事同盟，但汉武帝却被张骞的故事深深吸引。

“从匈奴国逃脱去寻找大月氏国的时候，途中经过了一个叫大宛的国家。这个国家在我国的西方、匈奴国的西南方，与我国相隔一万多里。”那个国家的人以农耕为生，种植水稻、小麦，还有水果。那里的葡萄酒堪称一绝。对了，还有一件事我一定要上奏圣上，那里的马叫做汗血宝马。是一种流着血色汗水的神奇的马。这绝对是全天下最好的马。马种优良、毛色亮泽，聪明伶俐、通晓人性且能日行千里。此国人口数十万，大大小小的城池有 70 余座，所有的士兵都精通骑射。[3]有如此优良的马匹他们的士兵善于骑射也自然不是什么奇怪的事了。

“大宛的北边是康居，西边是大月氏，西南是大夏，东北是乌孙，东边是扜弥、于阗。”

张骞接连不断地说出好多国家的名字，这些国家汉武帝从来都没有听说过。张骞上奏皇上因为此行的目的是寻找大月氏国，所以大宛、康居、大月氏以外等国的情况他也只是道听途说罢了。

张骞讲述的那些新奇的事物让汉武帝心花怒放。这些未知的国家就这样突然地进入到汉武帝的视野之中，他很想得到那里的珍宝，尤其是大宛的名马。张骞所说的流着血色汗水的马，他闻所未闻，见所未见。如果这真的是天下间最好的马，那我一定要弄到手。虽然和大月氏结成军事同盟合力围剿匈奴的愿望破灭了，但是汉武帝萌生出了新的年头，就是希望可以让士兵们骑着大宛国的名马去攻打匈奴。他认为如果有了这些马就能够轻松的击败匈奴了。

[3] 《史记》大宛列传载：其俗土著，耕田，田稻麦。有蒲陶酒。多善马，马汗血，其先天马子也。其属邑大小七十余城，众可数十万。其兵弓矛骑射。

张骞上奏的大宛国现今位于乌兹别克斯坦共和国的费尔干纳盆地，康居国相当于现在的吉尔吉斯斯坦共和国。而张骞奉汉武帝之命出使的大月氏国位于布拉哈的东部。

张骞的这次出使，让他成为东洋史上第一个带回西域消息的人，更让他成为了在留名青史的幸运儿。张骞出了玉门关，穿过横亘在塔克拉玛干沙漠上的东突厥斯坦，紧接着翻越了天山和被称为亚洲屋脊的帕米尔高原，到达了西突厥斯坦。在穿越塔克拉玛干沙漠的时候，张骞选择的路线是从天山山脉的南麓也就是所谓的天山南路。自古以来，从中国到东突厥斯坦共有三条路线。沿着天山北麓前行的路叫天山北路，沿着天山南麓前行的路叫天山南路。除此之外还有一条途径塔克拉玛干沙漠南部各国的路，这条路被称为西域南路。所以以此类推，张骞所选择的天山南路就相当于西域北路。从中国这边的东突厥斯坦到苏联那边的西突厥斯坦，张骞完成的是一场横跨中亚的大旅行。可以说张骞是一位冒险家，也可以说他是一位探险家。

前面提到的三条路线都是翻越天山或者帕米尔高原到达西突厥斯坦的路线，今天在地图上，只有两条可走的路线。一条是走乌兹别克斯坦共和国的费尔干纳盆地，另一条是走吉尔吉斯斯坦共和国的楚河盆地。这两条都是丝绸之路的主要干道，对东西方文化交流起到了重要的作用。张骞当时是往大宛国的所在地费尔干纳盆地的方向行进的。

人类的往来就像水流一样，从中国流向东突厥斯坦，从东突厥斯坦流向西突厥斯坦，是一直都不会中断的，我相信在张骞到达西域之前这种往来也一直没有中断过。无论是横亘东西的塔克拉玛干沙漠，还是天山和帕米尔高原上耸立的常年积雪的险峻的山峰，都无法阻挡人们的脚步，人们会抱着某种目的继续往来。并且是以接力的方式，把西突厥斯坦的物资运送往东突厥斯坦，然后估计又会运往中国。或是反过来把中国的物产送去西方。这种方式就这样被世世代代地传承下来。

在东西方的交流的道路上，人类意志的轨迹仿佛一根细线，把天山和帕米尔高原山间串联在了一起，有的地方是很清晰的，有的地方则是断断续续的，似有似无地延续着。如果从飞机上俯瞰天山和帕米尔高原，就一定能感受得到那种拒人于千里之外的神灵的强大意志。只有这个地方能够让人感受到一种禁止任何人类踏足的神灵的意志。但是，自太古时期以来人类就一路披荆斩棘钻入神秘莫测的深山之中，并在那里留下自己的足迹。

我们的张骞穿过那样的一条路，作为第一个公职人员翻越了险峻的天山，到达了天山对面的那片开阔的平原。之所以说那里是开阔的平原是因为那里没有像天山和帕米尔高原那样高的世界屋脊了，那里是一片延伸到咸海、黑海的无止境的沙漠地带。

虽然有些对不起张骞，但是我确实坐着车在费尔干纳盆地南部的安集延州上兜了个风。平坦的马路贯穿了整个大平原。简而言之，费尔干纳盆地是一个 5 万 2400 平方公里的大平原，东西长 320 公里，南北跨越 174 公里，相当于欧洲几个国家的大小。东面、北面、南面山脉环绕，只有西面的苦盏一处可以出入。从古至今这个盆地曾多次遭受其他民族的侵犯，亚历山大大帝、阿拉伯、蒙古都曾从西面的入口侵入过。锡尔河发源自

北面的恰特卡尔山脉和东面的天山山脉，流经盆地的北部。另外，人们还从锡尔河引流，建造了几条人造运河。具体来说呢，北面有一条，南面有两条，另外正中央还有一条运河正在修建中。其中，南面的那条叫做费尔干纳运河，长 350 千米，宽 28 千米。正是靠着这些大运河，这个盆地才能这么顺利地发展农业。

费尔干纳盆地隶属乌兹别克斯坦共和国，居住者大部分都是乌兹别克斯坦人，另外还有五十多个其他民族的人。现在费尔干纳、安集延、纳曼干、浩罕这四个城市分别散落在间隔 90 公里的地方。其中，安集延、浩罕和苦盏、库瓦、乌兹根这些城市都是从公元前就一直存在着的历史古城。

我无法想象在张骞到达这里的时候这个盆地是什么样子的，但是毫无疑问翻越天山而来的张骞只到达了这个盆地的东部，也就是现在的安集延州。并且恐怕是向着把盆地的西南部串联起来的现在的安集延、乌兹根、浩罕几个城市的西面走了。张骞并没有从苦盏方向的出口出去，而是再一次翻越了北部的山脉进入了康居（吉尔吉斯斯坦）。从康居可以清楚地看到天山前山。就像刚刚说的那样，翻越天山也可以到达这里，可是张骞并没有选择这条路线。并且他从这里出发进入沙漠，向着大月氏国进发。大月氏国现今位于的布哈拉的东面。如果在地图上把张骞所走过的路连成一条线，从天山的山襞、到锡尔河的河边、再到沙漠的中央，在这样广阔的降雨量里张骞的身影是多么渺小。

汉武帝本想在得到大宛国的汗血宝马之后再堂堂正正地与匈奴展开决斗，但岂料在此期间匈奴屡屡入侵，战争已经刻不容缓。汉武帝暂且搁置了夺取汗血宝马一事，下令让大将军卫青讨伐匈奴。那一年是元朔六年（公元前 123 年）。汉武帝在此次战役中任命历经了十年俘虏生活，对匈奴的情况了如指掌的张骞担任校尉一职，随大军一起出征。果然，张骞对当地的地理环境十分了解，对军队的帮助非常大。这次战役的胜利让张骞受封成为博望侯。

第二年，也就是元朔七年，张骞再次受命随军出征讨伐匈奴，但这次却因为没能按计划与另一支军队汇合而令汉军惨败。张骞本也不是武人出身责怪他也无济于事，但是因为军队的一部分主力因此被敌方包围节节败退伤亡惨重，所以汉武帝也不能不对他做任何处置。按理说这次的罪过应当判以斩刑，但是考虑到张骞出使西域有功，便只削去了他的官位。自此张骞便成为了庶民。

此后的三、四年间骠骑大将军霍去病屡立战功、战果累累。霍去病击败匈奴几万大军，并一路追赶至祁连山，因此河西一带根本看不到匈奴的一兵一卒。

眼看着与匈奴之间的战斗大获全胜，汉武帝的脑海中又想起了遥远的西域中的国家。要说西域的事情，就一定要召见张骞前来商议。虽然在实战中出了丑，但是说起西域的事情，张骞简直是判若两人，他总能将西域的情况描述地栩栩如生。

“对了，臣有一事还未向陛下禀明。有一位英雄叫昆莫，他的父亲被匈奴所杀，而他一直在匈奴的阵地中生活。虽说他是被匈奴抚养长大的，但是长大后却脱离了匈奴建立了乌孙国。臣以为若能与他交涉成功定能让陛下如虎添翼。总之，只要事关匈奴，此

人都会尽量控制自己不要插手，绝对是一个德才兼备的人。如果我们大汉赠予他财宝，让他归顺我朝，与乌孙国结成联盟，必能重创匈奴。最重要的是，西域各国定会纷纷效仿乌孙国臣服于我大汉。”

张骞的这番话对于汉武帝有着致命的诱惑力。于是汉武帝说道。

“好，既然如此就依张卿所言即刻出发吧。朕任命你为中郎将，帅300士兵赐600匹马随行。”

汉武帝这次十分慷慨。而早前从博望侯被贬为庶民的张骞也因作为大汉出使西域的使者而成功翻身。

张骞带着300匹载着大批礼物的马，再次踏上了西域之旅，而这次的目的地是乌孙国。虽然和上次一样要穿过一片荒无人烟的沙漠，但是乌孙国距离大汉并没有大月氏那么遥远。乌孙民族一直盘踞在现在的新疆维吾尔自治区和苏联领地交界的地方。但是，这次前往乌孙国，却与张骞之前料想的不太一样。昆莫不想与大汉交往过密，使其与匈奴之间产生嫌隙。

张骞并没有空手而归。他带着乌孙国的十几名使者和几十匹名马一起回到了大汉。另外张骞也没有忘记派手下的人去大宛、康居、大月氏、大夏、安息、身毒、于阗、扜弥这些距离大汉较远的国家。大夏在现在阿富汗北境的地方，安息是现在的波斯，身毒是现在的印度，于阗和扜弥则是在西域南路沿线上的国家。

汉武帝十分讲究排场，眼见乌孙国十几名使者大举来朝非常满意。汉武帝立即任命张骞为大行令，位列九卿。所谓大行就是负责接待宾客的官职，位属九卿所以座位列于高官席内。功成名就的张骞在乌孙国归来的第二年就去世了。在张骞死后，他派往各国的手下们也带着该国的人回到了大汉。张骞——这个西域之路的开拓者也因此名声大噪。其实张骞不过是不负所望出色地完成了汉武帝所交代的事情。

大宛的汗血宝马 2

在张骞死后，每当汉武帝召见那些民风奇特的民族的时候，就会想起张骞说的那些关于西域的话。

——大宛的汗血宝马！

好想得到这广负盛名的西域名马。这件事在汉武帝的心里挥之不去。张骞已死，也找不到能与他商量此事的人了，所以要想得到汗血宝马就只能自己想办法了。

汉武帝派使者去大宛求马，却没有谈拢。不止谈判失败，大汉的使者在归国途中遭到袭击，无一生还。

汉武帝得知此事，立刻昭告天下要讨伐大宛。既然有了讨伐大宛的正当理由，就应该出兵讨伐大宛，这样一来汗血宝马也就到手了。

汉武帝任命李广利为主帅让他带兵出征大宛。大宛境内有座城池叫二师城，汉武帝听闻此城盛产汗血宝马所以便赐予李广利二师将军的称号。这样一来李广利的任务就很

明确了，他不仅要讨伐大宛，还必须要把二师城的汗血宝马带回大汉。李广利是汉武帝最疼爱的亡妻李夫人的哥哥。汉武帝提拔自己最宠爱的妃子的哥哥为二师将军，想要让他成功讨伐大宛载誉归来。对于李广利来说这次的出征不知到底是福还是祸。和妹妹李夫人一样李广利也是一个样貌俊秀的青年，爱好音律，但对于带兵打战之事却没有任何经验。如果是让他和大宛谈判劝服他们让马的话也许还可以办到，但是让他以武力战胜对手并强行把马带回大汉确实有些难度。但既然汉武帝已经下令，不管他有没有交战的经验他都必须出兵大宛。

李广利的军队是在太初元年（公元前 104 年）从都城出发。大部队包括几万名自愿参战的混混以及几千名他国的俘虏和归顺大汉的士兵。

大军行进几十天后，军队分成了几个小组，依次通过国境线上的玉门关进入沙漠。李广利作为主帅自然是骑着骆驼走在队伍最前面，但其实他对几个月后的交战并没有任何把握。军中人数中众多是唯一的优势，但原本也只是一群乌合之众，没有经过任何训练，也算不上是一支统一管理的正式军队。

军队从出关的第一天开始就遭遇各种困难。至今为止经过了外族聚集的河西地带，粮草不足住宿条件艰难。而出了玉门关之后就完全属于境外了，不管哪一个村落都没有为大汉军队提供粮草的义务，行军之路困难重重。有时与他们商量让他们出售粮草、有时恳求他们提供粮草，有时甚至动用武力，经常这样在一个地方浪费好几天的时间。其中也有一些友善的部落，但是由于士兵们的强取豪夺这种难得的善意最后也都变成了敌意。

史书上并没有记载大汉的这支西域远征军是从塔克拉玛干沙漠北边还是南边的路线穿过沙漠的。大约过了一年左右逃兵的数量明显增多了。有的时候甚至会有一天跑掉几十个人的情况。李广利每天都在考虑要不要返回大汉。以目前的情况来看要想到达大宛还需要好几年的时间。而且我们的目的不仅仅是到达大宛国，而是要与大宛交战。

就这样又过了几个月，二师将军李广利还没有下定决心，部队已经进入了天山，不久终于到了一个叫做郁成的地方。因为那里属于大宛的管辖范围，所以大宛的士兵把守在城门口。

李广利派兵围住了郁成。虽然汉军立即展开了攻势，但是从城内的大宛的士兵却让汉军无法形成合围之势。所幸城内的士兵数量不多，所以汉军并没有遭受毁灭性的打击。但是已经没有希望攻下这座城池了。连郁成这样的小城池都攻不下来，更何况是大宛的都城二师城呢。任谁想都绝无可能。更糟糕的是逃走的士兵越来越多，粮草问题也亟待解决。再在这里待下去很可能会有人饿死。

李广利询问手下："现在一共有多少人逃走了？"

"军队里八成的人都逃跑了。"

"那粮食呢？"

"已经到了山穷水尽的地步了。一旦士兵们开始争夺粮食，就真的完了。"

“完了是什么意思？”

“就是连将军的性命都成问题了。”

二师将军神色大变。这样一来只能返回大汉了。带着剩下的士兵返回玉门关总比全军覆没要强。于是汉军解除了包围，趁着黑夜离开了郁成。

俄罗斯历史学者们认为，这个被汉军包围而又逼得他们迅速撤退的小城池郁成位于吉尔吉斯斯坦共和国的奥什州也就是现在的乌兹根。当时这个地方被称为“yuu”，中国的史书中记为“郁成”。乌兹根是在天山山内的一个村落，这里是东突厥斯坦进入费尔干纳盆地的必经之路。张骞前往大月氏的时候应该也途经这里。至今这里还保留着古时的塔和部分城墙，它们是撒马尔罕有名的历史遗迹。然而这个隐藏在古帕米尔高原山中的历史遗迹不是一般的外国旅行家可以进入的。笔者我也没有办法亲眼看见这些遗迹。

话说回来，李广利率领的讨伐大宛的军队花费半年多的时间才回到玉门关。这次远征最终耗时两年，而军队士兵也只剩下数千人。

李广利派使者进宫向陛下禀明事情的原委。

——路途遥远粮草匮乏，士兵不怕打仗却担心挨饿；士兵数量少不足以攻陷大宛国。希望暂且收兵，将来再多派士兵再前去征讨。（道远乏食，且士卒不患战而患饥，人少，不足以拔宛，愿且罢兵，益发而复往。）

据《史记》记载，这就是使者向皇上禀明的内容。几十天后皇上派出的急使到达玉门关，急使宣汉武帝旨意让玉门关内的士兵全部撤出，到关外等候，并下令让把守玉门关的士兵们加强戒备。

——军中胆敢有随意入关者，斩立决。

只要跨进一步，就会被斩首。二师将军李广利也没有办法，只得留守在玉门关外。不知道皇上何时才会下令让他们入关，但是在皇上下旨之前怕是不能进入大汉境内了。

一年后，从都城出发的六万大军到达玉门关，也被编入李广利麾下。这次的军队和之前的完全不同，士兵们个个身强力壮。擅长拉弓的囚犯被允许加入军队，边境的骑兵也被编入这个军队。虽然号称六万大军，但实际人数远远不止六万。这里还不包括自备粮草随军参战的人和私人的随从、兵士等。除了士兵以外，还有十万头牛、三万多匹马、还有数以万计的驴和骆驼。这一次粮草充足、武器齐全，一切的准备都比之前的征讨军队更充分。

为了以防万一，汉武帝在酒泉、张掖等靠近国境线的地方部署了十八万兵力，准备为大军提供补给。另外在征讨军中也安排了熟知马匹的 “执驱校尉”。不用说，这一安排是为了将大宛的马匹带回大汉。

在汉武帝的周密计划下远征大部队的编制顺利完成，他再次把最高指挥权交给了李广利。汉武帝想再给爱妃的哥哥一次将功补过的机会。

二师将军李广利已经做好了万全的准备，率领装备齐全的大部队再次出兵讨伐大宛。据《史记》记载“相传李广利奉命讨伐大宛，一时间成为了全国热议的话题”。从这里

可以看出这次是举全国之力支持远征军。这次大汉军队分成了几个小队分别从南北两路向大宛进发。

这次的远征和之前完全不一样，可能是由于这次远征军的规模比较强大，外族人心生敬畏，所以沿途小国纷纷进献食物，为汉军提供方便。第一场战争是在仑头打的。经过几天的浴血奋战终于成功歼灭了敌人。紧接着大军向西进发，暂时绕过郁成直接攻打大宛的王都二师城。向二师城进攻时大汉的先头部队共有三万人。在到达这里的时候大军士兵人数仅剩三万。

汉军在城外迎战大宛从城内派出的军队。汉军以弓箭手为主力大破敌方，转眼间就包围了整座城池。汉军围城四十天，双方日复一日地进行着攻防战。虽然在此期间汉军切断了该城的水源，让坚守在城内的部队十分苦恼，但即便这样也没能轻易地拿下这个城池。

在战争进行到第四十几天的时候汉军终于攻破了外城。在这次的攻防战中，大宛王族骁勇善战的名将煎靡被汉军所俘。城内的王族们互相商量要杀死宛王毋寡，一名王族提着他的头提出要和平谈判。——我们可以把好马拿出来任你们挑选，相应地你们要立刻停战，如果你们不接受我们的条件，我们就把所有的好马都杀光，并与你们奋战到最后等待康居援军的到来。

于是李广利便和手下共商对策。康居的援军确实已经到了，而且实力不容小觑，只不过因为汉军现在气势正旺，他们不敢贸然挑衅。

李广利答应了大宛的条件。此行的目的终于达成——大宛在王城内的大会场将汗血宝马赠予汉军。李广利挑选了几十匹好马，三千多匹普通的马，并扶持亲汉的昧蔡继任宛王之位。李广利最终没有把汉军带进大宛内城，就这样返回了大汉。

但是攻击郁成的 1000 支军队遭到了郁成军的猛烈攻击，伤亡惨重，指挥官王申生也在这场战役中阵亡。得到这个消息李广利立刻发兵郁成，郁成王战败逃往康居却被康居人捉住交给了汉军。郁成王还没被带到李广利面前就被斩了。

汉军出兵讨伐大宛的事情震惊了西域的各个国家。在汉军凯旋归国的路上，途经小国纷纷把自己的孩子送进汉军的军队，这些人都会作为人质被留在大汉。

二师将军李广利顺利地完成了这次的任务，堂堂正正地从玉门关进入大汉。出发时的六万大军现在也只剩六分之一了，战马也只剩几千匹了，不过汉武帝终于得到他垂涎已久的名马，内心十分满足。于是汉武帝封李广利为海西侯，并大方地赏赐了军队的将士们。军队中有三人受封九卿，一百多人受封诸侯相、郡守、二千石级官吏等，有一千多人受封一千石级官吏。

虽然《史记》中清楚地记载了被二师将军李广利的部队包围并带回马匹的城池名叫二师城，但是有几处也将二师城记载为大宛的王都，从这一点看来二师城应该是大宛的都城。

但麻烦的是与《史书》同等地位的《汉书》中记载，大宛的都城是贵山城。这样一

来就引发了争议，“二师城和贵山城到底指的是不是一个地方呢？或许只是因为所处时期不同所以有了二师城和贵山城这样两个不同的名字。又或者这两个城池根本就是两个不同的地方。”学者们有过各种各样的解释甚至是争论。在这里我们暂且把这两个地方都算作大宛的都城吧。这不是笔者个人的假设，而是因为学界大多数学者都是这样论述的。

即便如此，还有一个大问题没有解决，那就是大宛的都城到底在哪里？在史书中记载的二师将军李广利带回汗血宝马的二师城，又或是，《汉书》中所说的贵山城到底在哪里呢？——不仅是学者们，我们也对这个问题颇有兴趣。想知道那个在两千年前盛产名马的地方到底在哪里，也想知道那个举世闻名的牧场现在变成了什么样子。

这个问题在全世界引发了讨论，学者们都各执己见。我国的学者桑原骘藏、白鸟库吉、藤田丰八等学者也曾就此展开过一场激烈的辩论。

他们在大正四年到大正七年相继发表论文表达自己的观点。桑原博士发表了两篇论文《关于大宛国的贵山城》、《再论大宛国的贵山城》；藤田发表了《读贵山城与监氏城考》；白鸟博士发表了《大宛国考》；藤田丰八发表了《大宛的贵山城与月氏的王庭》。此外白鸟博士还于明智三十九年发表了题为《大宛国的汗血宝马》的论文。这些论文的内容都是论述大宛国都城的所在位置。从二师和贵山的发音、再到《史记》、《汉书》中记载的内容从该地的地形、河流大小，所处位置，再推算其与其他国家的距离，根据这些推测大宛王城的具体位置。这些论文就好像推理小说异样，即使不是专业的学者也能一定感受到它的趣味性。

浩罕（那珂通世）、乌拉秋别（李希霍芬）、苦盏（戈尔德施密特、三宅米吉、桑原骘藏）、卡桑（拉克伯里、赫尔曼、白鸟库吉）这些都是学者们考究的历史上成为过大宛都城的地方。白鸟博士最开始是乌拉秋别阵营的，后来加入卡桑派。除此之外也有学者提出大宛以前都城可能在马尔吉兰。如果画一张费尔干纳盆地的地图，将这些城市都标注在地图上，就会发现这些选项分布在盆地的各个地方。二师将军李广利给后世留下了一个十分棘手的问题。

那么苏联学者对这个问题又是怎么看的呢？前些年去世的著名考古学家伯恩斯坦姆于 1946 年在距奥什市（费尔干纳盆地南侧）西北方 250 公里处一个叫阿拉万的小村庄附近发现了画着马匹的壁画，他根据这个有利的线索提出了新的猜想。

沿着街道从奥什市走到费尔干纳市，沿途能看到有一条河名叫阿拉万河。那个马就画在河流右岸的墙壁上。一共有两处。较高的那幅画画在在距离地面大约 15—16 米高的地方，作画的人使用金属制工具画了几只野生山羊和一公一母两匹马。

伯恩斯坦姆在《中央天山以及帕米尔阿拉的历史考古学概说》（1952 年苏联科学协会刊）一书中指出“石壁上的马从外观来看与蒙古和西亚等地区的马不太一样，认为石壁上所画之马就是中国人所说的汗血宝马。那这里应该就是马匹能顺利繁殖的神圣之地。”土马巧克和巴尔托里德认为二师城就在库瓦和奥什之间的奥什河河边，就位于现

今的马尔哈马特废墟附近。

伯恩斯坦姆汇报了马尔哈马特遗迹的挖掘结果，马尔哈马特城四周有坚固的城墙，还有很多防御塔，西侧有 18 座，东侧有 16 座，北部和南部分别有 12 座和 6 座。在城内还发现了 16 个 Tepe。从挖掘出的遗迹来看，是属于公元 213 年的，另外也确认马尔哈特城分为内城和外城。伯恩斯坦姆认为古费尔干纳的都城二师城不仅仅是全国的政治中心，也是“名马”的培育中心。而那些画就是为了祈祷马匹能顺利繁殖而画的。另外关于二师城和贵山城的关系，他认为在编写《史记》的年代时大宛的都城是二师城（马尔哈马特），而到了撰写《汉书》的年代时都城由二师城迁移到了贵山城（卡桑）。

伯恩斯坦姆提出的的马尔哈马特说到底有没有说服力呢，曾经显赫一时的大宛国的都城之争是否可以就此画上句号呢，我身为一个门外汉当然没有资格去评判他。但有一点我明白，无论二师城和贵山城的位置到底在哪，正是因为有了大宛国的都城之争才有了这么多有价值的研究。

我是五月下旬进入费尔干纳盆地的。五月份的费尔干纳盆地有点像日本的早春时期，多多少少还有一点冷。我去了学者们所说的古时二师城或者贵山城的所在地——库瓦、浩罕、马尔吉兰等城市。库瓦是当地有名的石榴产地，那是个静谧的村落，到处都是白色的土屋。虽然他们大量对外出口石榴，但是那里的石榴树却并没有那么多。村落的中部非常热闹，街道两旁的漏天茶馆里聚集着很多老人。刚走出村落就看到了烽火台的遗迹。那是一个几乎已经塌陷了的土块，如果没有人介绍的话谁都不会想到那个是烽火台的遗迹吧。那个烽火台底部有一个底座，底座前站着一大堆孩子。我看不出他们到底是乌兹别克斯坦、吉尔吉斯斯坦还是塔吉克斯坦族的孩子。这附近是一片一望无际的平原，在平原的各处都可以看到成排的桑树、白杨和梧桐树。

库瓦只是一个小小的土屋村落，而马尔吉兰则是一个很大的城市。街道两旁种着两排行道树，大街上能看到各式的近代建筑。但好像只有城市的中心是这样的，其他地方都十分安静，而且大部分都是土屋。关于这里的集市我已经在序章里面提到过了，完全是一派繁荣的景象，怪不得说这里是中亚的心脏。这里非常喧嚣、混乱，我甚至以为所有的少数民族都聚集在了这个平原上。浩罕要比其他城市更大一些。据说在浩罕王国的繁盛的时期这里曾被作为都城，街道中心还有一个非常气派的博物馆。

库瓦、马尔吉兰、浩罕都是费尔干纳盆地上的历史古城，它们的历史可以追溯到公元前。当然这些历史古迹已经不存在了。八世纪时阿拉伯曾经入侵过这里，而十三世纪时蒙古也曾入侵这里，这两次入侵让这里的街道变得面目全非，曾经的住民也不知去向。更何况张骞和二师将军李广利是在更久远的时代来到这里的。如果说什么记录着历史的东西，估计也都已经深埋于黄土之下了。毕竟这里经历了好几次民族交替，大宛国的汗血宝马也在这片平原上消失的无影无踪，只留下了石壁上几匹不会动的马。然而我觉得这些都是再正常不过的事。

站在费尔干纳的平原上可以眺望到远处白雪皑皑的山脉，若要问我当时的感受的话，

其实我是想到了一些人。我想起了古代在这里战斗并带回了大批宝马的二师将军李广利。作为已故宠妃的哥哥，李广利不负所望成功讨伐大宛国，之后又再次作为主帅出战讨伐匈奴。李广利本来也应该和卫青、霍去病等人一同成为赫赫有名的大将军，留名青史的，但他却没能逃过命运的捉弄。征和二年（公元前 91 年）在他第二次出征的时候，在战场上得知自己因"大疑狱事件"被问罪，为了能够挽回名声他率部队深入敌军，但这次并没有上次讨伐大宛那么顺利。李广利被匈奴活捉，随后被斩首。这一年距离他出征大宛已经有十多年了。

天山上的湖

张骞奉汉武帝之命出使西域，不负所望出色地完成了任务，因功被封为博望侯、继而被任命为大行，位列九卿。虽然张骞已经死而无憾了，但铺张奢靡的汉武帝却在张骞死后越发得对他的封赏并不够。正是源于张骞对西域的情况的回报才让他知道并得到了大宛的汗血宝马。而与乌孙国结成同盟一事也是因为张骞的谏言，而后张骞又作为大汉的使者出使乌孙。与乌孙国结成友好关系不只关乎乌孙一国，对西域各国也有着极大的影响。这确实是在汉武帝统治时期的一件举足轻重的大事。西域各国纷纷与大汉交好并进献了很多奇珍异宝。不知这样，各国还向汉武帝进献了珍贵的鸵鸟蛋、奇术师和幻术师。胡人们各自组建商队，从遥远的西突厥斯坦翻越天山和帕米尔高原，穿越沙漠进入玉门关。后世所说的丝绸之路就是从这个时期开始出现的。这些无疑都是张骞的功劳。

汉武帝经常对身边的人说："如果张骞还在的话应该给他更大的封赏，凡事都要以他为榜样。"虽然汉武帝想给他更大的封赏，但张骞已经出任大行位列九卿了，也很难再给予他什么更大的封赏了。汉武帝素来喜欢颁布诏书，可能会赐予张骞一部写满华丽词藻的诏书吧。

但是有一个人却因为张骞一生都活在悲痛之中。那就是江都王刘健之女——刘细君。乌孙王昆莫向大汉进献一千匹马，求取公主，而刘细君就是那个牺牲品。其实汉武帝早就想过通过下嫁公主来加深两国的友好关系，恰好这次乌孙国又向大汉进献了一千匹马。当时汉武帝还没有得到大宛的汗血宝马所以心里也很希望能得到乌孙的马。顺便提一句，汉武帝为了区分这两种马匹，把乌孙国进献的马取名为"西极"，而大宛的马则被称为"天马"。不愧是公主的婚礼，衣着华美艳丽。出了都城后迎亲队伍就一直在河西走廊一带穿行。而过了玉门关踏入异域之后公主的迎亲队伍和普通的商队就没有什么区别了。只是多了一些护送新娘轿子的骑马队和骆驼队而已。

公主此行所到之处都有人前来迎接。去往乌孙国的沙漠上有三十多个国家，这些国家现在都已经完全臣服于大汉所以不用担心会遭受袭击。而且匈奴也已经逃到遥远的北方，所以也没有什么威胁。只不过公主要嫁去的地方在大汉国力所能震慑的地区的最西端。这一路确实没有什么可担心的，但是嫁过去之后的生活是否安稳就不得而知了。也不知道乌孙国会不会与邻国兵戎相见。也正因为这样乌孙才会向大汉求亲。

乌孙国横跨吉尔吉斯斯坦共和国东北部以及古代中国新疆的西北部。活动范围在天山山脉北侧的伊犁河湖、伊塞克湖、塔拉斯河流域一带，是以放牧为生的游牧民族。

——乌孙国在距大宛东北方 2000 公里的地方。乌孙国的人民并不是一直定居在一个地方，他们和匈奴一样会随着畜牧迁移。乌孙国有数万名弓箭手，乌孙国曾受制于匈奴的，后来随着国力日益强大逐渐摆脱了匈奴的控制。

这就是《史记—大宛传》中所记载的，张骞第一次向汉武帝介绍乌孙这个国家时所说的话。虽然张骞已经离开人世了，但从张骞介绍乌孙到公主远嫁，这中间并没有相隔太久。自那以后乌孙国的疆域没有任何变化。

不久大汉年轻的公主到达了乌孙，那里是天山山间的一处草原。见到前来迎接她的乌孙首领昆莫时她大吃一惊。虽然判断不出他的实际年龄但是看上去年纪很大。公主以前经常听到有关昆莫的传言，但亲眼见到后却发现和她想象的完全不一样。

——昆莫刚出生没多久他的父亲就被匈奴杀死了，而他被遗弃在田野里。鸟儿为他找来食物，母狼为他哺乳，让他得以茁壮成长。匈奴的掌权者知道了此事便将昆莫收养于营帐之中。因为他觉得昆莫并非人类的孩子，而是神灵的孩子。昆莫就这样一直生活在匈奴的营帐中慢慢地长成了一个健壮的青年。带兵打仗之时他也表现出了超凡的才能。于是匈奴的掌权者就将昆莫父亲以前管辖的土地和人民交给他，让他镇守西境。但是匈奴的掌权者一死，昆莫就带着同族的人移居别处，摆脱匈奴的束缚重新建立了一个独立的国家。匈奴屡次出兵讨伐但始终没能成功。匈奴人认为他绝对不是一个普通人，一定是神人，所以放弃了讨伐。（匈奴攻杀其父，而昆莫生，弃于野，乌肉蜚其上，狼往乳之。单于怪，以为神，而收长之。及壮，使将兵，数有功。单于复以其父之民予昆莫，令长守于西城......单于死，昆莫乃帅其众，远徙中立，不肯朝会匈奴。匈奴遣奇兵击不胜，以为神，而远之。）

关于昆莫的传闻大致就是这样的。传说他是逢战必胜的武将、被神灵保佑的神人。而大汉公主细君在天山山中的营帐里所见到的昆莫与传闻中的相差甚远。虽然他年事已高容貌有些苍老但是丝毫没有看出他哪里像神人。红色的头发中混杂着白发，蓝色的眼睛也已经变得混浊。举手投足都给人一种老态龙钟的感觉，事到如今已经完全看不出他是一个统帅三军的武将了。昆莫说道："美丽的大汉公主啊，从今天起你就是我的右夫人了，虽然你已远离故乡但请不要悲伤叹息。我既已年迈，过些时日找个适当的日子我会将你嫁予我的孙子。"

昆莫早年丧子，他想把王位传给他的孙子岑陬。确实如昆莫所言，大汉的公主与他孙子的年龄更匹配。细君既为昆莫年迈一事伤心又因语言不通而倍感痛苦。

大汉不断派使者来访。有一天乌孙国年轻的右夫人把她自己写的一首诗交给了大汉的使者。

我的国家把我嫁到了天的另一边

让我侍奉去乌孙国的国王。

（从此我）以毡帐为家，
兽皮为墙，
生肉为食，
酸乳为浆，
无论是白天还是夜晚，
我都无比的痛心难过。
脑海里不断浮现起我的家乡。
啊啊，
我想化身为一只黄鹄，
啊啊
如果我能化身黄鹄，
就可以在天空自由翱翔，
就可以回到我心心念念的故乡。[4]

《史书》里记载 “吾家嫁我兮天一方。”公主确实是嫁到了远在天边的地方。

不久之后匈奴得知大汉的公主成为了昆莫的右夫人于是也送去了一名匈奴女子。昆莫封匈奴女子为左夫人，同时也想借此机会将大汉的公主嫁予自己的孙子岑陬。对于公主来说年轻也好年迈也好都没有什么区别，他并不想改嫁，于是奏请汉武帝说明此事。但汉武帝没有答应她的请求，并回信让她遵从乌孙的风俗。公主和岑陬育有一女，而公主只在乌孙国生活了四五年就去世了。

公主死后，大汉又封楚王刘戊的孙女刘解忧为公主，下嫁岑陬。

那么在大汉公主仅待过数年的远在天边的乌孙国的都城在哪里呢？《汉书》一书中记录了乌孙国的都城是“赤谷城”，这篇记述稍晚于公主所经时期。“讨伐乌孙，与敌人交战至赤谷城。”、“攻打至赤谷城东”、“沿北路进入赤谷经过乌孙。”，这些记录中都出现了“赤谷”这个地名。但是关于它的具体位置，文章里并没有类似的记载。学者们也是众说纷纭。有的说在伊塞克的东面，有的说在伊塞克湖的南面，还有的说在纳伦河的峡谷里。正如公主所说的那样，它在天山的深山之中，在天的另一端。丝绸之路是一路沿着伊犁河穿过伊塞克湖湖畔又经过赤谷城通向西方。

我在吉尔吉斯斯坦内沿着丝绸之路穿越伊塞克湖来到了伏龙芝和托克马克这两个城市。楚河发源自天山，在这里形成了楚河盆地，而伏龙芝和托克马克都在这个楚河盆地上。从伏龙芝可以清楚地看到白雪皑皑的阿拉套山脉。这个山脉其实是天山山脉的分支。而当我们走到托克马克后，眼前的楚河盆地看起来更像是一个广阔平原。在三五公里外的地方，平原被雪山截断，平原上的道路一直延伸到阿拉套山脉的山谷之中，山脉的对面就是伊塞克湖。

[4]吾家嫁我兮天一方，远托异国兮乌王延。穹庐为室兮旃为墙，以肉为食兮酪为浆。居常土思兮心内伤，愿为黄鹄兮归故乡。

这次我来到吉尔吉斯斯坦最想去的地方就是伊塞克湖。这里和南路上的乌兹根一样，目前都不允许普通的外国旅行者进入。因为这些地方一般只供是考古学家考究古迹，所以我们能进入托克马克也已经实属不易了。

从伊塞克湖到托克马克之间的这一段路在古代是有名的通商之路，在这条路上不断重复着中亚地区的民族争霸，它见证了各民族的兴亡。

匈奴、鲜卑、柔然......乌孙国接连遭受这些游牧民族的侵略，不久就迁移到了西边的帕米尔高原，在历史上销声匿迹。那已经是公元五世纪的事情了，现在自然很难再找到乌孙国的旧址了。

据说在伊塞克湖湖底发现了一处古都的遗址。暂时无法判断它属于哪个时期。还有一个可能性，它可能不是一个时期的产物，可能包含着各个时期的城镇和村落。关于此时我之后会再详细说明。那么乌孙到底是一个怎样的民族呢？这一点也同样无法考证。苏联的一部分学者认为乌孙和消灭希腊巴克特里亚王国（大夏）的斯基泰系中的“アシアン”人是同一种族的。也就是认为乌孙民族属于伊朗系民族。但也有学者认为他们和匈奴一样，属于土耳其系人种。现在看来后者的说法更有说服力。

大汉公主细君一直生活在伊塞克湖畔旁的王城中，公元前一世纪，她短暂而又痛苦的一生就此结束。此后的六七百年间这片土地上还发生过什么我们也无从得知。再次期间中国与外族的关系不断发生变化，有些时期中国的影响力甚至能覆盖到到天山山脉对面的地区，有些时期则是关闭玉门关完全断绝与西域的往来。汉武帝所开辟的这条通往西域的道路辉煌过也衰败过。它曾是联通东西方的重要的通商之路，也曾经历衰败完全荒废。在此期间中亚各民族也一直经历着兴盛和衰亡。东突厥斯坦的塔克拉玛干沙漠周边的小国、南路沿线的国家、北路沿线的国家，它们一直经历着争斗，一直处于分裂、统一、消亡、兴盛的变化过程中。天山对面的西突厥斯坦也是同样的情况。乌孙这个国家完全销声匿迹，而在六世纪时出现了一个非常强大的游牧民族——突厥，一直到七世纪中期这个民族一直处于全盛时期。

在此时期唐僧玄奘曾经路过伊塞克湖，据史书记载这是中国人第一次踏足天山山谷的伊塞克湖。

玄奘就是《西游记》中那个有名的三藏法师。玄奘名袆，出生于河南省洛阳市东边村庄里一户姓陈的人家，他是家里的第四个孩子。具体出生于哪一年已无从知晓。有人说是公元 596 年，有的说是 600 年，还有人说是 602 年。玄奘一生的事迹都收录在《大慈恩寺三藏法师传》和《续高僧传》中的《盛京师大慈恩寺释玄奘传》这两本书中，但关于他到底出生于哪一年，两本书的记载却是不一致的。

《三藏法师传》中记载，玄奘在 13 岁的时候在洛阳的净土寺出家，17 岁移居到了长安，同年又到了四川成都。当时成都也是国内数一数二的城市，求学之风盛行。他之所以更换住所是也因为当时正值动乱时期，隋朝灭亡唐朝初建，玄奘辗转各地想找个能够静下心来学习的地方。在 21 岁的时候他贸然离开成都，之后开始辗转于各个寺庙之

中，求学于得道高僧。当他再次踏入长安之时，玄奘已经成为了享誉全国的得道高僧。怎么想都觉得他并非凡人。

26 岁的时候这位优秀青年立志西游，虽然向当时的政府提出了申请但是没有被批准。终于在贞观三年（公元 629 年）他决定冒着犯法的危险逃往国外。玄奘想去佛教的发源地天竺（印度），亲眼看看释迦的出生地，也想去看看那些还没读过的佛经。

在玄奘之前有一个叫法显的人在四世纪末期就由中国出发经西域到达印度，他也是我国第一个到印度的人。法显在印度待了 15 年后回国撰写了《佛国记》一书。几乎在同一时期罗什（鸠摩罗什）从印度来到中国。到了六世纪又出现了达摩。基于佛教僧人们对佛法的渴求和弘扬佛法的精神才使得中国和印度这两个相隔千里的国家有了一些联系。

玄奘一路翻越天山，到达西突厥斯坦，又启程前往印度。玄奘在回国后用了一年的时间完成了《大唐西域记》一书，书中详细地记录了他十几年游历的经过。从《大唐西域记》这本书中可以得知，玄奘此次西游历经无数苦难。不过可能是因为西域中那些民族听说过有关于这位逃到国外的高僧的传言，玄奘所在各地都受到了当地居民的欢迎和援助。即便是这样，他语言不通，又不了解当地的风土人情，就这样不停地辗转于各个国家，这种辛苦确实不是普通人能够体会的。玄奘辗转经过高昌国、阿耆尼国、屈支国、跋禄迦国等西域北路沿线上的小国，最后到达天山。他在通过天山支脉凌山的时候吃尽了苦头。

——从跋禄迦国向西北走了三百多里，穿过石滩，到达凌山。这里就是葱岭的北原，这里的河流大多流向东方。山谷常年积雪，春夏交替时也有冰冻，虽然有时也会消融，但很快又会冻结。所经之路艰难险阻，寒风凛冽，多毒蛇猛兽，难以？。路过此地的行人，不能穿褐色的衣裳？因衣？不能拿着葫芦大声喊叫。一旦违背，马上就会发生灾祸。狂风大作，飞沙走石，遭遇此宰的人大多丧命，难以生还。[5]

实际上在翻越凌山后玄奘的同行随从还有牛和马都已经所剩无几了，所以他并有夸大其词。历经重重困难终于翻越了凌山，玄奘见到了美丽的伊塞克湖。湖水再美看到的也只是一瞬间而已，我更想要与我一路同行的那些伙伴。当然，在玄奘所在时期那里并不叫伊塞克湖。玄奘称它为大清池。

——从凌山步行四百多里就到达了大清池。或者可以叫它热海或是咸海。湖方圆一千多里，东西长南北短。四面环山，河流交汇。池水呈青黑色，味道又咸又苦。池中鱼龙混杂，常有灵怪出没。所以途经此地的人都会祈求平安。湖里水产虽多，但没有人敢

[5]国西北行三百余里，度石碛，至凌山。此则葱岭北原，水多东流矣。山谷积雪，春夏合冻，虽时消泮，寻复结冰。经途险阻，寒风惨烈，多暴龙，难凌犯。行人由此路者，不得赭衣持瓠大声叫唤。微有违犯，灾祸目睹。暴风奋发，飞沙雨石，遇者丧没，难以全生。

捕捞。[6]

书中记载此地常出现灵怪，但却没有说明这些灵怪到底是什么。这并不是玄奘杜撰出来的内容，因为他所记述其他内容非常真实。伊塞克湖之所以又称热海是因为它终年不会结冰，而咸海的称呼是因为湖水中含有大量盐分。

玄奘经过伊塞克湖，翻越阿拉套山，沿着楚河一路走到楚河盆地。不久就到达了突厥的都城——碎叶城。玄奘的记述十分简洁"从大清池西行 500 多里就到达碎叶水城。"

碎叶城在现在的托克马克附近。从湖畔到托克马克，一路没有其他的城市。乌孙时代的都城赤谷城的位置在史料上并无记载。大汉朝的公主成为了王妃，后来又成为了国王孙子的妃子，历经多年的赤谷城在玄奘时期就已经消失的无影无踪了。不知道是凌山的暴龙所为呢，还是大清池的灵怪在作祟呢。

回到正题，玄奘达到的碎叶城就是当年突厥首领的营帐所在地。

《大唐西域记》中是这样记载的。"碎叶城方圆六七里，聚集着各个国家的商人。……碎叶城西侧还有几十座孤城。"[7]一些游牧民族在碎叶城的西方安营扎寨。玄奘在这里见到了突厥的可汗（国王）。可汗身穿绿色斜纹长袍，额头上缠着丝绸，丝绸长约一丈一直垂到后背，头发是露出来的。200 名随从个个都穿着丝绸，梳着两条长长的辫子。

乌孙国的赤谷城已经消失了，取而代之的就是现在的碎叶城。它是这个地区最繁荣的村落。据说现在在吉尔吉斯斯坦共和国有八十多个民族，恐怕以前也是这样吧。"各个国家的商人都聚集在这里。"这一点从古至今一直都没有改变。

玄奘从这里出发经过撒马尔罕到达阿富汗。接着穿过兴都库什山脉的山谷和巴米扬向着目的地印度前进。玄奘在印度成为了有名的高僧，归国之路又经历磨难，当他回到大汉时已经四十多岁了。

回国时玄奘受到了人们的热烈欢迎。皇上一早就派官员到玉门关去迎接玄奘了。从玉门关到都城，随行人数不断增加队伍日渐壮大。此后玄奘一直在长安生活，直到九十多岁去世。这几十年里，他一直在全心全意地翻译从印度带回来的佛经。

玄奘翻越葱岭，到达大清池，穿过碎叶城，向着撒马尔罕的方向前行。从现在的地图上看，玄奘先翻越天山的ベデル峠，然后到达吉尔吉斯斯坦的伊塞克湖，接着穿过位于托克马克附近的突厥的都城，最后朝着撒马尔罕的方向前进。伊塞克湖到托克马克再到伏龙芝，这一带确实是古代东西方交流之路上的重要地区。这条连通东西方的商业之路一直发挥着重要的作用。玄奘到达后又过了大约半个世纪，大唐的势力范围已经波及到了这里，大唐的军队从突厥的手上夺取了碎叶城，重新整修扩大规模，并更名为碎叶镇。之后大唐的军队又在这里驻扎了半个多世纪，这里住着中国人、突厥人还有一些西方的民族，形成了一个国际化大都市。随着时间的推移，不知何时碎叶城、碎叶镇这些

---

[6] 山行 400 余里至大清池，（又名热海，又谓咸海。）周千余里，东西长，南北狭。四面负山，众流交凑，色带青黑，味兼咸苦。......龙鱼杂处，灵怪间起。所以往来行旅，祷以祈福。水族虽多，莫敢渔捕。

[7] （《大唐西域记》中记载"城周六七里，诸国商胡杂居也。......碎叶以西数十孤城。"）

名字也在历史上消失了。土耳其系王朝——喀剌汗王朝统治了这里，而它的首都八剌沙衮就这样登上了历史的舞台。从十世纪中叶到十四世纪末期八剌沙衮一直处于鼎盛时期。有的学者认为此地就在托克马克附近，也有学者认为这里就是俄罗斯考古学家们挖掘出来的阿克别希姆遗址。

五月中旬我们驾车从吉尔吉斯斯坦的首都伏龙芝向托克马克的方向行驶。我想到古时碎叶城、碎叶镇、八剌沙衮的所在地托克马克一带看看那里到底是什么样子的，也想亲到阿克别希姆遗址去看一看。

伏龙芝离天山的前山阿拉套山脉近在咫尺。在松本看到的日本的阿尔卑斯山也差不多就是这么大。我们从伏龙芝开车前往那个雪山。托克马克距离伏龙芝大约 75 公里，慢慢走的话大概需要两个小时。楚河盆地地势平坦一望无际。平原上种着很多高大白杨和柳树。这个地区有很多麦田，绿色的草原相间分布。车辆就这样来来回回地穿梭于各个的小村庄之间。

托克马克是一个非常安静的城镇，城内建筑多为白色。城镇的周围是一片广袤无垠的大草原，城镇里到处都是高大茂盛的树木。走到哪里都能看见茂密的古树，所以整个城镇看上去有些昏暗。静谧的小巷里飘扬着白杨数的种子。无论是从整个城镇的气氛还是居民的表情都看不出这里有什么历史痕迹。只有一点让我们确切地感受到这个城市确实有着悠久的历史，那就是这里住着来自八十多个民族的人。

接着我们离开了托克马克前往阿克别希姆遗址。遗址在距离スタラヤ・ポクロフカ村西南方 5 公里远的地方。这里到处都是一望无际的草原，这里的路上到处都是积水，就好像不久前刚经历过一场洪水一样。我们的车子不断地在山崖间上上下下，在河流边溅起层层水花，在草原上来回地画着之字。

我们在挖掘现场附近下了车。这里满眼都是美丽的大草原。35 公里外就是阿拉套山了，但不巧的是因为阴天所以我们根本看不见那个白雪皑皑的山峰。平原上散落着几处丘陵。这里到处都是历史遗迹，现在只挖掘了两处，这两处都是寺庙的遗址。也有几处城墙和烽火台的遗址，但是目前还没有开始挖掘。我眺望着这片土地，心想：等这些遗址都被挖掘出来就能知道这是一个什么样的村落了。在这里出土的文物一部分陈列在艾尔米塔什博物馆，还有一部分陈列在伏龙芝的博物馆里。

那这个遗址到底是不是喀拉汗王朝的八剌沙衮城呢？这是我最好奇的问题。俄罗斯的考古学家们大致持两种观点。一种认为这里就是八剌沙衮，一种却对此持强烈反对意见。

巴托尔德和伯恩斯坦姆认为古时的八剌沙衮就是现在的阿克别希姆城。但是负责这次挖掘任务的科兹拉索夫却反对这一说法。据资料显示，八剌沙衮城一直保存到十四世纪，而从阿克别希姆城的遗址中找出的文物都是属于五到十世纪的。还有一种说法是，在阿克别希姆东南方 5 公里左右发现的布拉纳遗址才是八剌沙衮的遗址。但科兹拉索夫也否认了这个说法。哈喇契丹（西辽军）包围了八剌沙衮城整整 16 天，并杀死了称城

内四万七千多名伊斯兰教徒。而布拉纳城规模很小，根本无法容纳这么多人。另外，近期英国学者克劳森提出，阿克别希姆遗址正是玄奘笔下的碎叶城。苏联学者克里亚施托尔内也认同这一观点。

伊塞克湖隐藏在天山的山谷深处，即便如此，在玄奘到达这里之后也就注定了它不会在历史的变迁中置身事外。八世纪阿拉伯的入侵，十三世纪蒙古的侵犯，还有帖木儿大部队的转移。各个民族纷纷表现出了想要一统中亚的雄心，而伊塞克湖就是这段历史的见证者。在各国军队入侵的间隙，这里也曾出现过中国军队的身影，也曾见证了以喀拉汗王朝为首的统治者们的荣耀和风采。每当这个时候伊塞克湖附近就会有新的城市和村落出现。有时是大的城池有时是一些零散的小村落。这部分内容并没有什么详细的记载。

关于伊塞克湖的详细介绍是从阿拉伯时期和之后的十四世纪的帖木儿时期才开始有的。据帖木儿时期的文献记载，一些聚落在湖畔周围定居生活，那里繁花似锦、绿草如茵，居民们在这里种植果树。湖上有一个岛，上面有一座皇宫。资料里还记录了帖木儿经常会在打完仗后到天山来，在湖里洗去一身的疲惫。至于是不是真的确有其事我们也无从得知。可以肯定的是，帖木儿的军队确实到过这里。但他有没有一个人来过这里就不知道了。但是似乎在湖中真的有个岛，而在岛上也确实有一座城池。

有趣的是，这个岛和岛上的城在十五、十六世纪时还一直存在着，但却不知道在之后的那一年里突然消失的无影无踪。十八世纪上半叶，俄罗斯人出现在了这里，他们记录的内容显示，当时只有少数的吉尔吉斯斯坦人在伊塞克湖畔这里放牧。而他们所绘制的地图里也没有关于那个岛的任何信息。

从十九世纪中期开始俄国的探险家们来到这里，其中就有著名的彼得· 彼得罗维奇· 谢苗诺夫和普尔热瓦尔斯基等人。普尔热瓦尔斯基共进行了五次旅行。第一次是到蒙古旅行，第二次是到罗布泊探险，第三次是到西藏实地考察，第四次是到青海的戈壁沙漠探险，在第五次去西藏探险的途中在伊塞克湖旁的喀拉和林去世。普尔热瓦尔斯基曾多次经伊塞克湖旁的小路翻越天山。人们根据他的遗愿，把他葬在伊塞克湖畔。

在我国最负盛名的西域探险家——斯文・赫定也来到过这里。在他的《游移的湖》一书中记载了他到伊塞克湖畔拜祭普尔热瓦尔斯基的事情。普尔热瓦尔斯基希望自己死后能葬在伊塞克湖畔，而斯文・赫定就以此事为例向大家阐述这个地方对于探险家们来说有多么大的吸引力。

彼得· 彼得罗维奇· 谢苗诺夫在有关天山的地理研究方面取得了令人瞩目的成绩，我猜他应该来过无数次了吧。对于彼得· 彼得罗维奇· 谢苗诺夫和普尔热瓦尔斯基来说，东突厥斯坦是必经之路，而伊塞克湖就是东突厥斯坦的开端，是漫漫长路上的一个重要基地。但是，这些伟大的探险家们都没有深入研究伊塞克湖本身的异变。因为还有天山和天山对面的未知世界在召唤着他们。

这三位探险家应该也从伊塞克湖附近的居民那里听到过一些关于这里的传说吧。

这个传说非常有意思。——从前这个湖是一片美丽的平原，平原上有几个比较繁华的村庄，人们过着和谐富足的生活。某天一个魔女来到了这里，施法让整个村庄的人都变得堕落。天山山中那个静谧美丽的村庄刹那间变得荒淫喧闹。天神看到此情此景非常气愤，于是在某个夜晚淹没了整个村庄，然后那里就变成我们现在看到的这个样子。

除此之外，还有一个传说。——过去的这个湖是一个村庄。这里的人们生活得十分和睦快乐。这个村庄唯一的缺点就是只有一处泉水，村庄的人们每天都拿着壶去打水。有一个圣人负责保管泉水的钥匙，人们从圣人那儿拿到钥匙，打水，打完水再锁好，然后把钥匙还给圣人。但是有一天有个女孩却违反了这个规定。她打完水后只顾着和爱人耳语却忘记把钥匙还给圣人。等这对情侣想起钥匙没还的时候已经太晚了。大量的水从泉口喷出，谁都没法阻止。转眼间整个村庄就被大水淹没了，没过几天整个村庄就完全沉入水底。

这样的传说还有好多，但大部分都是以悲局收场。